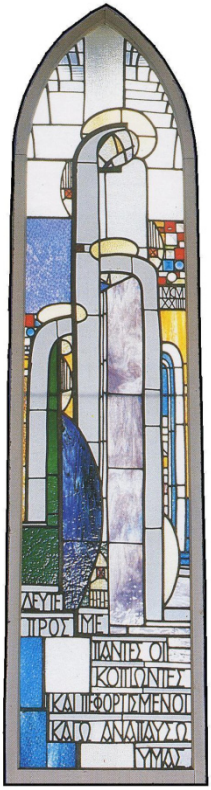
# 門前の小僧の辻説法

えー！　あなた　今どきキリストの

「復活」や「処女降誕」を信じているの？




疲れた者、重荷を負う者は、
だれでも私のもとに来なさい。
　休ませてあげよう。
（マタイ福音書 11 章 28 節）

# はじめに

ようこそ、「門前の小僧の辻説法」にお立ち止まり下さいました。正直なところ少々怪しげであるかもしれませんが、小生の話にしばし耳をお貸し頂ければ幸いです。さて、門前の小僧を名乗る小生は、英国国教会（Anglican church）系のキリスト教の教派「日本聖公会」に属するものですが、正規の神学を学んだことのないただの平信徒（layman）です。日本ではクリスチャンというと、何故か頭に「敬虔な」という形容詞がよくつけられますが、そんな高潔なイメージとは縁遠い酒好きの生臭クリスチャンであり、どこにでもいる日本人の一人であります。ただ幼少の頃から日曜日には教会の礼拝に出かけるという習慣の中で、物心つく頃から半世紀にわたり説教で語られる聖書に基づくお話しを中心に、キリスト教のメッセージをいわば聞き流し蓄積してまいりました。教会に出入りして多くの方々と出会い、感動を頂いたり、勇気づけられたり、喜怒哀楽を分かちあうといった機会に恵まれた生き方を重ねる中で、自分自身が育てられてきたことを実感しています。還暦という年齢に至り、今まで自分を育ててくれたキリスト教について、長年一緒に仕事をしてきた職場の仲間や友人達に何一つ伝えてこなかったことに気づきました。世の中にキリスト教の入門書は数多く出版されて存在していますが、神学者や聖職者が書かれたものは、キリスト教を知らない日本人には取っつきにくく、また、分かりにくいように思えます。それは、専門家としてあまりに厳密にこだわるためではないか、初めの一歩には少々怪しげではあってもキリスト教のメッセージやスピリット、そのエッセンスが伝えられることが大事ではないかと考え、平信徒である小生が普通の日本人にも分かる７０点メッセージを発信してみようと、この辻説法に立つことにしたものです。いや、７０点では困る、満点に近いキリスト教を学びたいと思われる方はどうぞご自分で教会の門をたたいてください。

# 目　次

はじめに
第 1 話　日本人の宗教感覚
第 2 話　日本人と宗教との接点
第 3 話　キリスト教信仰への道
第 4 話　祈りとは
第 5 話　誰が天国へ行くの?
第 6 話　悟るということ
第 7 話　キリスト教における律法
第 8 話　愛というキリスト教の律法
第 9 話　神を愛するとは
第 10 話　聖書が語る神の愛と隣人愛
第 11 話　人間の欲求
第 12 話　神が人を愛する方であるならば、何故人に苦しみを与えるのか?
第 13 話　人は神の形に作られている
第 14 話　生まれながら障がいを負った人のことを思えば、やっぱり神様は不公平
第 15 話　新約聖書と旧約聖書
第 16 話　最後の審判とは
第 17 話　キリスト教の最大のお祭りは、クリスマスではなく、復活祭である。
第 18 話　キリスト教の最大のお祭り復活祭
第 19 話　人は神と富とに兼ね仕えることはできない。
第 20 話　金持ちが天国に入るのは駱駝が針の穴を通るより難しい。
第 21 話　クリスチャンは何故毎週日曜日に教会へ行くのでしょう。
第 22 話　イエス様は言われた「わたしもあなたを罪に定めない」と
第 23 話　「赦す」ということ
第 24 話　わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。
第 25 話　日本におけるキリスト教宣教
第 26 話　世の光、地の塩となりなさい。
第 27 話　自然現象に神の業を見る
第 28 話　宗教はどれも同じなのでしょうか?
第 29 話　「孫に教えられ」の手記を添えた義援金
第 30 話　和解の出来事
第 31 話　沖縄愛楽園訪問
第 32 話　沖縄愛楽園の方々との出会い
第 33 話　祈りの家教会の方々
第 34 話　宗教に頼るのは弱い人間のすることなのでしょうか?
第 35 話　東日本大震災に見舞われた日本

## § 第１話　日本人の宗教感覚

日本人でキリスト教という宗教を聞いたことがない人はまずいないといってよいでありましょう。仏教、イスラム教と共に世界三大宗教の一つとして広く認知されている。しかしそのキリスト教の内容、教義についての理解度はとなるとかなり怪しげである。今日の日本人の大半が自分は無神論者であると思っていて、真面目な宗教は人を良い方向に導く面を持っているとしてその有用性を認めつつも、自分には必要でないものと思っており、「神」なる存在を認めようとしない。この無神論者を自認する御仁は、霊などという五感を通して感じ取れないもの、物理的に把握できないものの存在を信じることは非科学的なことと思っている節がある。一旦この世に生を受けた人間は存命中に肉体的、知的、精神的活動を営むものの、誰しも例外なく迎えることになる死の時をもって永遠に無に帰するものと考えている。人間は時間と空間の次元に閉じこめられた生物学的存在とだけ捉え、同時に霊的存在でもあるとは考えないようである。したがって、人生において他者を愛する思いも、時として命をかけて守ろうとする価値観もそれは脳内でなされた知的もしくは精神的活動であって、生物学的な死によってすべては無と化すと考えている。しかし、人の死はすべての終わりなのであろうか、人生とはひとときの夢であり結局のところ無に帰してしまうだけのものなのであろうか。そのように考える人には理解できないであろう「永遠の命」「復活」というキリスト教のメッセージは、人間の存在は生物学的な死をもって消滅するものではないということを教えてしているように私には思えます。すなわち、朽ちる運命にある身体としてだけで生きるのではなく、朽ちない存在としての霊的な自分を育てるように生きなさいとのメッセージであると思えます。人生において外なる人は衰え滅んでも、内なる人は成長する（第２コリント 4-16）と、初代教会の伝道者である聖パウロは述べています。

## § 第２話　日本人と宗教との接点

日頃は無神論者を自認する日本人が正月ともなると神社仏閣に初詣なるものをする。決して信仰に目覚めたというわけではない。新年を迎え、古い年の垢を落とし改まった気持ちで新年の生活を始めたいという思いのようである。手を洗い、口を濯いでさっぱりした気持ちとなって神殿の前に進むと、手をぱんぱんと打って頭を下げ、それぞれに何かのお願いを念じる。家族の健康、仕事の成功、いわゆる無病息災、家内安全、商売繁盛、良縁祈願、合格祈願などなど。このときは単に欲張りなお願いをするというわけではなく、「何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼれる」との西行法師の歌に通じるような気持ち、普段とは違う神妙な気持ちも起こるようである。その気持ちとは、神の前に立ち、自らの有り様を省みるという気持ちまではないが、自分達人間を越えるもの、「神」とは呼びたくないが天なる絶対的存在を仮想して神妙な気持ちになるようだ。

この初詣は別として、普段自分の問題として考えようとしていなかった人が、宗教というものを意識するきっかけ、機会というものに着目してみると、まず第一に親、兄弟、配偶者、子供といった身近な人を亡くしたときがあげられる。「長年一緒に生活した人が、愛する存在であった人が一体どこへ行ってしまったのだろうか?」という素朴な疑問が自分の問題として突きつけられる。普段無神論者を自認している人もこのときばかりは亡くなった人がすべて無に帰したとは思えないようで、地上の世界からはいなくなったが、どこか見えない世界に行ってしまったと感じるようである。この感覚は人のＤＮＡに刻み込まれているというか人間が本来的に備えているものと思われ、かなり重要なものであると私には思えるのである。

第二には、元気であった人が突然の病に襲われ、他者の支えなしには生きていけない状況に見舞われ、自分の非力を突きつけられたときも宗教というものを考える機会となっているようである。このとき、人は自らの力だけで人生を全うすることができないもの、一人では生きていけない存在であることを思い知らされ、今まで自分には無縁であると考えていた宗教について考え始めるようである。

第三には、特に日本人に多いようであるが、生き甲斐を仕事に見出してがむしゃらに走りつづけた人が、停年を迎え、もう明日から出勤に及ばずという状況に立たされたときなどである。生き甲斐を取り上げられたことによって虚脱感に襲われ、今までの自分の人生は一体何だったのだろうかと人生の意義を改めて考え始め、宗教へ目を向けるようである。このとき人は既に自分に与えられた地上での時間の大半を使ってしまっている。しかし、遅すぎるということは決してないのである。

## § 第３話　キリスト教信仰への道

キリスト教の「キリスト」とはメシア（油注がれし者）というヘブライ語のギリシャ語訳Χριστος（christos）（クリストス）からきています。頭に油を注ぐ儀式は古代イスラエルにおいては、王や祭司などの即位に際して行われていました。「キリスト」とは要するに「救世主」との意味で使われているのですが、「その救い主であるイエスは母マリアと許婚者であったヨセフとの間に誕生したのではなく、聖霊によって身ごもった処女マリアから生まれた。」そして、そのキリスト・イエスは３０歳くらいの年から約３年間の布教活動の末、ユダヤ教の指導者たちの妬みを買い、当時ユダヤを支配していたローマの総督の前に連行されて無理やり十字架の刑に処せられた。「しかし、三日目（金曜日の午後十字架上で死に、日曜日の朝に復活）に甦られ昇天されるまで弟子達はじめ多くの者の前に姿を見せられた。」

これは新約聖書が伝える出来事でありますが、この話を２１世紀の日本人に直接話して聞かせたならば、「え!今時のクリスチャンもそんな『復活』とか『処女降誕』を信じているの?」という率直な質問が返ってくるでしょう。私にはこのような反応は現代人として無理からぬこと、というよりむしろまともな反応であると思えます。もし、この『復活』とか『処女降誕』あるいは聖書に記述された病人や障がい者の癒し、５つのパンと２匹の魚で５０００人（家族）の食を満たしたといった奇跡物語に、「イエスという方はそんなことをなさったのですか。やっぱり神様の子だからできたのですね。私はこのような神の子イエス様に迷わず従って生きてゆきます。」というような模範解答?が返ってきたならば、それこそ「え!　あなたは何の疑問も感じないでこの話をすんなりと信じてしまうの?　大丈夫かしらこの人は。くれぐれも怪しげなカルト宗教などに走らないで下さいね。」と反って心配になってしまいます。信仰とは、分からないけれどとにかく信じてしまえばよいというようなものではありません。無理をせず信じられないところは、信じなければよいのです。これは真実だと実感できるところから一歩一歩進むことが大切であると思います。そうでなくてはその人の霊的成長はなされないと思うからです。

「人の子を汚す者は許される。しかし、聖霊を汚す者は永遠に許されない。：マタイ 12-32」これはイエス・キリスト自身の言葉です。これを小生の７０点解答で分かりやすく解説すれば、「イエスがキリスト（救世主）であるとか、処女マリアから生まれたとか、十字架で死んだ後復活したなんてとても信

じられない、と思ってもよろしい。しかし、貴方の心に語りかける神様の声（聖霊）に耳を傾けないような頑なな態度をとるならば、貴方の霊的成長は不可能であり救いようがない。」といっておられるのです。神に聴く姿勢、聖霊との交わり（神様との交信：祈り）こそが人間の命綱であるということだと思います。

## § 第４話　祈りとは

日本人が神社仏閣に参じて、祈るという行為をするとき、その「祈り」の内容はまず祈願するという色合いが強いように思われます。また、そのお願いが適ったときのお礼参りということもなされている。祈願内容は所謂、無病息災、家内安全、商売繁盛（仕事の成功）、死者の霊の平安、合格祈願、良縁祈願といったところがイメージされます。しかし、キリスト教が勧める「祈り」では神様へのお願いということよりも、「神の御心を聴く」ということが重要とされています。先に、「祈り」とは「神様との交信」であると申し上げました。交信ですから一方向通信ではなく、双方向通信形態であると考えて頂くとよいと思います。すなわち、人は神様に対面し、問題の問いかけをすると共に、その問題についての神様の導きを聴くという形態であり、この「神様に聴く」ことが祈りにおいてはより重要とされています。イエス様は「祈り」に関し次のように教えておられます。神様（天の父）は何がその人に必要であるかは既にご存知であるから、くどくどとお願いをしないでよろしい、ただ次のように祈りなさい。（マタイ６：9-13）といって祈りの模範スタ

イルを示して下さいました。この祈りは「主の祈り」と呼ばれ、キリスト教会は２０００年前から今日に至るまで、キリスト者が日々の生活の中で極めて重要な祈りとして用い続けてきたものです。因みにこの主の祈りは以下に示すものです。

「天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧（かて）を今日も お与えください。
わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。　　アーメン」
（日本聖公会／ローマ・カトリック教会共通口語訳）

なお、キリスト者の祈りは最後に「アーメン」と唱えますが、この「アーメン」はヘブライ語で「まことに、本当に」という意味の言葉です。祈りの最後にこれを唱えるのは「本当にそう思います。」という祈る者の意思表示なのです。

　ところで、神様との交信における発信器（聖霊の導き）の性能は確かだけれど、受信機（人間の感性）の性能はかなり怪しい。雑音の混入により本来の信号が歪んで受信されて（神様の声が間違って聞えて）しまうことが儘起こる。そこで、複数の人と共に一緒に祈るということが重要となるのです。個々の受信情報が歪んでいても多数の受信情報を突き合わせれば、雑音に埋もれた信号（神様の声）が判別し易くなり、雑音を取り除いて本来のメッセージを再生する作業が可能となるからです。イエス様は「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるので

ある。」マタイ 18：20 といわれました。これを小生の７０点メッセージで解説すれば、キリスト者は個人の祈り（神様との直接対話）も大事であるが、呼び集められた者の群れ（教会：エクレシア）の中で共に祈ることが重要であるといっておられるのです。

## § 第５話　誰が天国へ行くの？

真面目な日本人の中には、「もし、神様という存在があるならば、すべての人を公平に扱い、正しい評価をなされるはずである。だから一人一人の生き方をみて、世のため人のために一生懸命努力する人には恵みを与え、死んだ後には天国に迎え入れてくれるなど相応の報いがあるはずだ。」との思いがあり、そのような神様でないなら神様なんて必要ないと考える方が多いようだ。これは東洋的な考え方ともいえる「因果応報」の思想に根ざすものといえよう。確かに多くの宗教にはこのような一面が見え隠れする。宗教には一般に人を導く戒律なるものが定められており、その戒律を忠実に守って生きるものは善人とされ、救われるという教義である。これが正統な仏教の教えかどうか門外漢の私には分からないが、悪行よりも善行の方が多ければ閻魔様はその人を極楽行きにしてくれるという考えもこの類といえよう。また、トーラ（律法）を忠実に守ることこそ神の前に正しい者とされるとの強い信念をもっていたイエス時代のユダヤ教、とりわけパリサイ派の人々はその典型といえるであろう。意外に思われるかもしれませんが、イエス・キリストの教えでは律法を真面目に守って生きた人、立派な行いをした人が天国に行かれるとはいっていないのです。イエスが救いに必要なこととされたのは“悔い改め

て福音（神様からのよき音信）を信じる ” ことでありました。何を悔い改めるのかを一言で言えば、それは “ 自分の価値観に基づいて自分の力だけで人生を完結しよう ” とする生き方のことであります。これは人が神を必要としないで自らの力で自分の存在の責任をとろうとする姿勢であり、言い換えれば自らを神とすることであります。キリスト教ではこれを罪の根源としているのです。

人は物心が付いた時にはこの世に生を受けていたという存在であり、自らの意志で生まれてきた者は誰もいない。そもそも自らの存在に責任を持てる者などいないはずです。勿論親の意志や責任で生まれてきたともいえない。人の親となった者は自らが子の誕生に一役買ったことは確かであるが、自らの力で子をなしたものではないことはよく分かるはずである。キリスト教が教える罪とは、基本的に神の心を拒否することであり、神を必要としない傲慢こそがもっとも重い罪とされており、犯罪に代表されるような道徳的な悪を行うこととは異なるものなのです。一人一人をすべて異なる存在として作られた神様がその人間に求めておられることは、本当の親 ( 神 ) として子 ( 人 ) が聖霊の導きの下で霊として精神的に成長し、その人が本来のその人となっていくことであるといえるでしょう。そして、他者とは異なるその人となった存在、即ち、自分自身となろうと神の声に聴き従って生きた者は生物学的な死によって消滅することはない、とキリスト教は教えます。この世においては、人は体と心が一体となった存在であり、心は体を離れて存在することはありません。脳の機能と精神活動が密接な関係にあることは現代人が疑うことなく認めるところでしょう。しかし、人格という精神的実体は空間的、時間的次元に閉じこめられたものではなく、別次元（朽ちない世界：天国）へと拡がって実存するものとキリスト教は教えているように思えます。

要するに、良い行いを積むことによってではなく、神様に信頼を置いて生きていく姿勢の故に人は義とされ（信仰義認）、死なない（朽ちること

のない永遠の命）存在となれるというのがイエス・キリストの教えです。「あなたの信仰があなたを救った：ルカ７：36-50」といわれるイエスの宣言やロマ人への手紙３：28 に記された聖パウロが解く信仰義認を参照されてみてください。小僧の７０点メッセージで申しますと、キリスト教でいう永遠とは「時間の連続」「無限の時間」を意味するものではなく、「本物となる」という質の問題であるといえると思います。

## § 第６話　悟るということ

日本人には「悟り」を得ることによって、人間の弱さや、愚かさ、日頃の悩みや苦しみを克服できるようになると考えている方が少なからずおられる。我々凡人の目からすれば、世の出来事に泰然自若と少しも騒がないような人、大人（たいじん）と見える人に遭えば、悟りの境地に至ったすごい人と感心し、いつかは自分もああなりたいものだと憧れを抱く。仏教ではよく悟りということを問題とされると聞く。そこで、門外漢の私は百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』で仏教の悟りについて調べてみると次のような説明があった。

「仏教の悟り（さとり、覚り）は、原語のサンスクリットでは、bodhi ボーディである。日本語・漢語では「菩提（ぼだい）」「覚悟」「証（しょう）」「修証（しゅしょう）」「証得（しょうとく）」「証悟（しょうご）」「道（どう）」「阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみゃくさんぼだい）」「無上正等正覚（むじょうしょうとうしょうがく）」などの別称もある。

真理（法）に目覚めること。迷いの反対。さとりは仏教の究極目的であり、悟るためにさまざまな修行が説かれ実践される。仏教の悟りは智慧を体としており、凡夫（ぼんぶ）が煩悩（ぼんのう）に左右されて迷いの生存を繰り返し、輪廻（りんね）を続けているのは、それは何事にも分別（ふんべつ）の心をもってし、分析的に納得しようとする結果であるとし、輪廻の迷いから智慧の力によって解脱（げだつ）しなければならない、その方

法は事物を如実（にょじつ）に観察（かんざつ）することで実現する。これが真理を悟ることであり、そこには思考がなく、言葉もない。
釈迦（しゃか）は多くの哲学者や宗教家の教えを受け、苦行にも専念したが悟りを得られなかった。そこで今までの修行法をすてて、尼連禅河（にれんぜんが）で沐浴し身を清め、村娘スジャータから乳粥（ちちがゆ）の供養（くよう）を受けて河を渡り、対岸のピッパラ樹の下で坐禅をして禅定に入った。その禅定がしだいに深化し、三昧の中で「三明」が顕れ、真理を悟ることができた。これによって釈迦は悟った者（覚者）、すなわち「ブッダ（仏陀）」になったのである。

この悟りの境地を「涅槃（ねはん）」といい、それは「寂静（じゃくじょう）」であるとされる。煩悩が制御されているので、とらわれのない心の静けさがあるということである。」

哲学的な思考でなく、言葉にもよらない行を通してのアプローチ。お釈迦様は坐禅をして禅定に入り、その禅定がしだいに深化し、三昧の中で「三明」が顕れ、すべての真理を悟ることができたという。我々にとって極めて魅力ある「悟りの境地」であるが、禅定を深化させてすべての真理を悟ることなど小生のような凡人にはとてもできそうにないので、残念ながら断

念せざるを得ません。

キリスト教ではあまり「悟り」ということを問題とすることはないように思います。有り難いことに神様から永遠の命（合格点?）を頂くためには「悟り」が必要という教理はないのです。しかし、聖書においても「悟りなさい。」という言葉が度々使われています。これはすべての真理を悟る「悟りの境地」に至りなさいという意味ではなく、単にその事柄に「気づきなさい。」「理解しなさい。」という意味で使われているようです。この個々の事柄についての悟りというものはやはり重要なことで、人生における個々の躓きを乗り越える手立てであると思います。悟りといえるかどうか分かりませんが、小生の貧しい人生経験においても「大きな気づきを頂いて、自由にされた。」という出来事がありました。それは我が家系の中である病気を発病するという現象が続いたことがありまして、私の家系にはその病気にかかりやすい体質が遺伝されており、自分も何時その病気を発病するか分からないとの恐怖感に苛まれておりました。病気になれば、家族に負担をかけることになるから、自分は家族を持つことを諦めねばならない。友人達が次々と結婚していく中で、自分は異性を好きになってはいけないのだと愚かな考えに苛まれ、あたかも自分が呪われた存在であるかのように思って暗い日々を過ごしていた時期がありました。そのとき日頃からご指導を頂いていた司祭様から「君は自分でとれない責任をとろうとしている。神様にもっと信頼をおくという姿勢が大事ではないか。」と諭されたのです。この一言が、ガーンと小生を一撃し、目を覚まさせてくれたのでした。自分にとれない責任をこざかしい人間の知恵で対応しようなどということは神様を必要としない傲慢な態度であり、教会が教える罪に他なりません。あるがままの自分でよい、結婚する相手には自分の状況を隠さず説明し、病気になったらお互いにサポートするという了解ができれば何の問題もないことなのでした。悟ってみればどうということのないことですが、当時の私には重く立ちこめていた心の暗雲が吹き払われて青空を取り戻したような感動でした。

この様に人は些細なことに躓きますが、本人には結構深刻な問題となっていることが少なくありません。小生にとって悟るとは「理解する」というよりは「呪縛から解き放されて自由にされる」ことという表現が合うように思えます。お釈迦様のようにすべての真理を悟ることはできなくても、凡人は一つ一つの躓きから解放されて少しづつでも霊的に成長し、本来の自分自身の姿を求めつつ自分像を刻んでゆきたいと思うものです。

## § 第７話　キリスト教における律法

キリスト教はメソポタミア地方のカルデアで生まれ育ったアブラハムの宗教を基礎としている。紀元前 2000 年頃、神に導かれ、カルデアの都市ウルで生まれ、一族が住んでいたハランを出発して行き先が示されていない旅立ちをしたアブラム ( 出発当時の名前 ) は、長い試練となる砂漠の流浪をする。神に従順に従うアブラムは神の御心に適い約束の地カナンが与えられ、アブラハムとの名を戴く。名の意味は「父は高められる」の意で、彼が多くの民（ハモン）の父となる約束を神から受けたためである。アブラハムの信仰はイスラエルの民に引き継がれ、モーゼや多くの預言者を輩出しエルサレムを都とするユダヤ教となる。キリスト教はこのユダヤ教社会の中でナザレ（ユダヤのガリラヤ地方の村名）のイエスの教えによって２０００年前に誕生した。イスラム教も同じアブラハムの宗教を基礎として７世紀にムハンマド（以前はマホメットという呼び方をされていた人）によって始められている。要するに、世界三大宗教に数えられるキリスト教もイスラム教ももとはユダヤ教であり、この３つの宗教はアブラハムを

信仰の父としているのである。‥‥それだのに何故あんなにも仲が悪くてパレスチナでは際限なく争いを続けるのでしょうか。信仰の父アブラハムは困ったものだとさぞや心を痛めていることでしょう。（これは門前の小僧のつぶやき）‥‥　紀元前１０００年頃のモーゼの十戒を初めとするユダヤ教の律法 ( トーラ ) が記されているモーゼ５書は旧約聖書に取り入れられキリスト教の聖典とされている。したがって、キリスト教においても十戒などの律法は信仰者の規範として大切にされているが、律法 ( トーラ ) に対する考え方はユダヤ教、少なくともイエス時代のパリサイ派とは大きく相違している。イエスは事細かに規定されている律法をただ１つ「愛せよ」との戒めに集約された。「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」との問いにイエスは次のように答えられた。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。 第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これら二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている。：マタイ 22：36 以下」このイエスの言葉を例によって小僧の７０点メッセージとして分かり易く解説すれば、聖書（旧約）には生活全般に渡り事細かに規定がなされた律法や、多くの預言者のメッセージが記述されているが、その本質はすべて「神を愛せよ」と「隣人を愛せよ」というこの二つの戒律に帰着するものであり、これが守られるならば自然と規律に沿い律法の趣旨、預言者のメッセージが伝わるものなのだと言っておられるのです。すべての律法も預言者によって伝えられた神の言葉もすべてこの「愛せよ」の一語に尽きる。なお、この、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」との言葉の原典は旧約聖書の申命記６：４です。

また、キリスト以前と以後における律法の役割の変化について、初代教会の伝道者聖パウロは次のように説明しています。「信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで

閉じ込められていました。こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。」（ガラテヤ書３：23-25）すなわち、キリスト以前、律法は養育係としての役目を担っていたというのです。

## § 第８話　愛というキリスト教の律法

イエス・キリストがたった一つに集約された「愛せよ」との戒律はキリスト教の本質でありますので、愛について少しく考えてみたいと思います。「愛」という言葉は、私たちの日常の場で盛んに使われていますが、皆様はどのように理解されているでしょうか。例えば「私はあなたを愛しています。」という言葉から私たちは通常男女の恋愛感情を連想します。この場合の「愛」は「好き」「恋い慕う」という言葉とほぼ同義語です。この他「親子の愛」「兄弟愛」「友愛」「師弟愛」「同志愛」等が使われます。いずれの場合も、愛にはその対象があって愛する主体はその対象に対して「愛する」という思いを持つという点で共通しているといえるでしょう。この「愛する」という思いは深まるとその対象を単に「好き」という観念を越えて「とても大切なもの」と捉えるようになり、大切と思う故に「自己を犠牲にしてでも」その対象に尽くしたいという気持ちにまで昇華されるようになります。

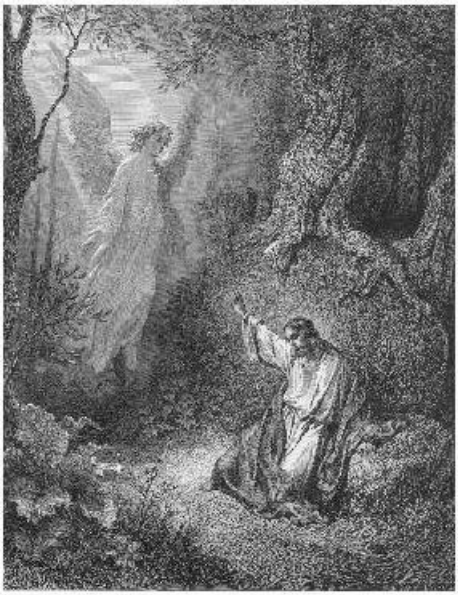
私自身の言葉として愛の定義を試みてみれば、「愛の対象が本来の姿となることができるように主体が自己犠牲をも厭わず対象を支援する心」と言えるように思います。このような思いがギリシャ語の「アガペ」という「惜しみなく与える愛」の概念であってキリスト教が教える「愛」に相当するといわれます。これと対照的に恋愛における「愛」は対象である相手に「求

める感情」を伴い、ギリシャ語の「エロス」という概念であるとし、キリスト教の愛とは異質であるとよくいわれます。確かに恋愛は片思いでは成立しませんから、相手も又自分を愛して欲しいとの熱い思いとなるため、「エロス」的色合いが強く出ますが、その成熟の過程で「アガペ」的愛をも備えるものとなると私は思います。

## § 第９話　神を愛するとは

イエス・キリストは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」といわれたのですが、人が神を愛するということはどういうことなのでしょう。考えたこともないという方には掴みにくい概念であろうと思いますが、この愛は子が親に感じる愛に近いものといえるのではないでしょうか。神への愛を理解するにはその前提として、神が人を愛しておられることをまず知ることが必要でありましょう。人間界における愛の中で、「親子の愛」とりわけ母親のわが子を思う気持ちが最も神の愛に近いものといわれています。それは母性として自己犠牲を厭わず子供を守り通さなければ、一人前の大人に育てなければとの気持ちが根源にあるからでしょう。この母の思いと接し方は子供に安心感を与え、子供に母への信頼と依存心を起させます。乳幼児は母の愛が注がれないと健全に育たないということは、多くの事例から明らかにされていることです。親が真に子に求めることは親である自分を大事にして欲しいとか、偉くなって欲しいとかいう気持ちを越え、我が子が一人の人間としてしっかりと自己を確立して歩む姿を見せてくれることでありましょう。その神 ( 親 ) の人 ( 子 ) に対する願いに応えようとする人 ( 子 ) の思いこそが神を愛することに通じるのではないでしょうか。聖書には人が神を愛することについての記述は多くないように思いますが、１２弟子の筆頭であるペテロがサタン ( 悪魔 ) よ!とイエス様からひどく叱られる場面が出てきます。「あなたは神のことを思わず、人のことを思っている。（マタイ１６：23)」人の思いとは人

間的な情に大きく左右されますが、神の思いは本来のあるべき姿を求める点で大きく違います。人は神様が自分を受け入れ大切に思い、自分が成長すること、すなわちその人がその人自身に成長するように守り導いてくださっていることを知ることにより、父のような神を慕い、敬い、信頼して生きてゆく思いが生まれるのではないでしょうか。イエス様は神を父（アッバ）と呼ばれました。アッバという言葉はヘブル語で父という意味ですが、威厳ある父というイメージではなく、幼子が「おとうちゃん」と呼ぶイメージ、すなわち、信頼しきって父の胸に飛び込んでいくような時の呼び方です。これが神への愛ということでしょう。イエス様は生身の人間として最後のお仕事となる十字架に付けられる前、ゲッセマネという場所で父なる神に「できることならこの杯（十字架に架かること）を過ぎ去らせて下さい。でも私の思いではなく、御心のままになさってください。（マタイ２６：39）」と祈られます。これこそが神への愛の究極でありましょう。生身の人間として死を受け入れたくはないという当然の思いがありながら、それがなさねばならないこと、神の御意思であるならばそれを受容するという神への徹底した信頼と従順の気持ちです。ここがキリスト教の教える愛がヒューマニズムと決定的に違ってくる点であるといえるでしょう。



## § 第 10 話　聖書が語る神の愛と隣人愛

次に「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」との戒めですが、「神を愛せよ」との戒めよりこちらの方がどなたにも理解しやすいかと思います。聖書は神の愛を次のようなたとえ話で教えています。迷える子羊の話、放蕩息子の話などです。群れから外れてしまい迷子になった１匹の子羊をもおろそかにしないで探し求め、手をさしのべる神の愛。また、放蕩の限りを尽くしたのち悔い改め、下男として使ってもらおうと帰ってきた息子を我が子として歓迎する神の愛が語られています。これは神様が人を愛する形として示されますが、この「神様が人を愛する心」が「人が隣人を愛する心」の模範となるのでしょう。上記の戒めを、小僧の７０点メッセージで分かり易い解説すれば「人は本能的に自分を大事にする心を植え付けられているものであり、他人のことは他人のこととして無関心とならず、他人に起こったことを我がこととして受け止めなさい。そうすれば他者との関わり方にも血が通います。」ということでしょう。

聖書に記された次の物語を聞いてください。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。

「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカの福音書 10：25 ～ 37）

ここに出てくるサマリア人とは、サマリア地方に住むユダヤ人の親戚に当たる人たちで、もとはといえば同じイスラエルの民であったのですが、外国支配を受けたときに他民族の血が混ざったことでユダヤ人は大変に軽蔑し嫌っていた人たちです。祭司とはエルサレムの神殿に仕え、礼拝を司るユダヤ人の超エリートで、レビ人とはやはり神殿で祭司の補佐役をするエリートです。上記の善きサマリア人の話はユダヤ教のエリート達が困っている人を見て見ぬふりで放置し、ユダヤ人から蔑まれていたサマリア人が災難にあった人を助けて愛を示したというお話です。このイエス様のたとえ話を分かりやすくいえば「困っている人に出会ったなら、この人は私の隣人ではない知らない人だからといって避けることなく、あなたがその人の隣人となって助けてあげなさい。それが隣人を愛するということです。」ということでしょう。

「隣人を愛せよ」の前には「神を愛せよ」との前提があり、この二つの戒めは対で理解しなければなりません。それ故、この隣人愛は前述したように所謂ヒューマニズムとは異なるものといわなければなりません。神が人に示す愛はキリストの贖いに象徴され、その究極の愛はヨハネによる福音書第 15 章 13 節に記されている「友のために命を捨てる、これに勝る愛はない。」であります。そしてキリストであるイエスは人間の罪を身代わりとなって引き受け、罪を贖う生け贄として十字架に架かって死なれました。

ところで、友のために命を捨てるなんてとても出来ることじゃない。そんなことを要求するキリスト教はやっぱりごめんだなんてつぶやいて居られるあなた。そんなに尻込みしないで下さい。究極の愛を持って神様に従う立派な人は聖人といわれるような人であって、我々並の人間にはできることではありません。先にも申しましたように、神が人に求めておられるのは立派な行いではなく、神様を拒否したこと、間違ってしまったこと、できないことを認めて謝る（悔い改める）こと、神様に信頼をおいて歩むことです。我々の間違い、足りなさは、基本的にイエス様が十字架の死によって贖って下さったわけですから、既に解決済みです。ただ、我々俗人が罪を犯すのは仕方がないことで、その代償としてイエス様は十字架にかかってくれたんだろうなどと居直るのではなく、罪を認めて謝罪する心と、にもかかわらずそのような自分が受け入れられていることへの感謝、許された者として新たに歩もうとする心だけは持ちたいものです。すなわち、子供の不始末を親が代って償うのは当たり前だと嘯くようなどら息子ではなく、親の願いと苦しみを理解する者でありたい。不始末を処理してもらうことに申し訳なさと感謝を感じて、今後は親の気持ちに背かないように歩むことで親子として心が通う関係を保ちたいということです。

## § 第 11 話　人間の欲求

アメリカの心理学者であるアブラハム・マズロは、人間の欲求は 5 段階のピラミッドのようになっていて、底辺から始まって徐々に 1 段階上の欲求を志すという説を唱えました。なるほどこの説はもっともらしいと私は思っています。すなわち、その人間の欲求の 5 段階とは「①生理的欲求→②安全の欲求→③親和の欲求→④自我の欲求→⑤自己実現の欲求」とされています。生理的欲求と安全の欲求は，人間が生きる上での衣食住等の根源的な欲求であり、のどが渇けば水を求め、空腹となれば食を求め、危険に脅かされれば安全を求めるといったことです。親和の欲求とは、人

は一人では生きてゆけず他人と関りたい、他者と同じようにしたいなどの集団帰属の欲求です。自我の欲求とは、自分が属する集団（社会）から価値ある存在と認められ、尊敬されることを求める認知欲求のこと、そして、自己実現の欲求とは、自分の能力、可能性を発揮して創造的活動や自己の成長を図りたいと思う欲求のことです。人生の意味を考察する哲学や宗教の領域はこの第５段階に属するものといえるでしょう。

人は誰しも活動（仕事）に生き甲斐を求めるものであり、団塊世代などの真面目な日本人は仕事人間としてがむしゃらな生き方をしてきました。組織人であれば組織内でより権限をもって運営に参画し、自分の思うように活動したい。そのためにはできるだけ高いポストに座りたいとの思いから、他者に後れをとらないようにと停年までひたすら走り抜いたという方も多いでしょう。しかし、年齢が進み、組織から外れ上司の評価から開放されてみると、あれは一体何だったのだろうかと疑問を抱いた方もきっと居られるでしょう。家庭をもっと大事にすればよかった、子育て時期にもっと子供達と向き合う時間を持てばよかったなどと、ちょっぴり悔いておられる方も居られるのではないでしょうか。日本人にありがちな働き過ぎはよくない、自分を見失う危険があるとキリスト教は教えています。そこで、教会は日曜日を主日と決め、主なる（自分の主人である）神を思う日、すなわち神様と向きあい自分を取り戻す日とすることを勧めています。「忙」という漢字は「心を失う」と書きます。古代中国でも賢い人は夢中になって働きすぎることの危険性を知っていたのです。人から尊敬されたいとか、

社会から価値ある存在と認められたいといった第４段階の「自我の欲求」から、抜け出すのはなかなか難しいことかもしれません。しかし、いずれ遠からず迎えることになるこの世との別れの時までに、人の評価よりも大事となる自分が本物の自分となって朽ちない存在に成長しているかどうかが心配ではないでしょうか。人間であるならば自分探しと自己確立をめざして第５段階「自己実現の欲求」に進みたいものです。

## § 第 12 話　神が人を愛する方であるならば何故人に苦しみを与えるのか？

時として、私達の周りには［不条理］としかいいようのない出来事が起きます。例えば、２００１年ニューヨークで起きた９．１１テロの犠牲者や２００５年の福知山線脱線事故の犠牲者などたまたまその場に居合わせた人が非業の死を遂げたことなどである。天災や人災に巻き込まれるなどどう見ても本人の責任でない不合理な死に直面し、その家族にとっては納得しようのない現実の前で、神も仏もあるものかとの心情になる。これも基本的に因果応報の考えが根底にあるように思われますが、心情としては痛いほど理解できます。

私も実際に、福知山線脱線事故の直前に２５歳になったばかりの甥を交通事故で亡くすという出来事を経験しました。原因はダンプカーを運転していた人の不注意によるもので、人生これからという若者の死にはなんとも納得のいかないものを感じました。親・兄弟の思いはいかばかりかと慰める言葉も出ずそのときはただただ断腸の思いでした。神が人を愛する方であるならば何故人にこの様な不条理な仕打ちを行うのか、苦しみを与えるのか?という率直な疑問が生まれます。この事象を見て無神論者は「それ見たことか神様なんて存在しないのだ」ということでしょう。確かに、現実に起こる不条理としかいいようのない事象の過程で、救いの手をさしのべることのないように見える神様は何もしない冷酷な存在、無いに等しい

存在のように映ります。

人には理解し難いこの事柄をキリスト教会はどのように説明できるのでしょうか。

この難問、神のご意志を人間のこざかしい知恵で解明しようなどと思わない方がよい、疑問は疑問として直接神様にぶつけるのが人間らしいと思うのですが、小生はこの問題について次のように考えております。「人は神の形に作られた。」そして、「神はこの地上の管理を人に任せられた。」との聖書（創世記）の言葉を思いおこすとき、人を神の形に作りこの世界の管理者とされた神様は、人間の行動には無闇に干渉しないとのご意志が働いているのではないかと思われます。神様は人を意のままに動く自らの操り人形として造ることはなさいませんでした。人には自由意志なるものが与えられ、神を否定しその御心に背くことすら可能である存在として造られています。もし人の心がすべて善を行うように、間違いを起さないようにプログラムされていたならば、人の善き行いにはなんの価値もなく、ただのロボットが行う味気ない作業でしかないでしょう。神様は聖霊によって人の心へ働きかけ愛の行為を促し、正しい道への方向を示されるが、行動を直接コントロールされることはなさらない。人の管理に任せられた地上のことには直接手出しをしないとの決意をもって、人間が自ら考え、管理運営しより善い人間社会を形成することをひたすら希望しながらじっと見守って居られる。神様は、有史以来繰り返されている殺人、戦争、欲望行為、残虐行為、そしてそれらの犠牲者が生み出される不条理と思える様子をみつめつつ、お前達はまだ気がつかないのかまだ繰り返すのかと悲しみをこらえて我慢して居られるように私には感じます。

困難な状況の中でも何も助けて下さらないように見える神の存在ではあるが、自ら感じ、自ら工夫し、自ら努力して善い人間社会を作り上げることをひたすら願いつつ、じっと忍耐して見守って居られる。それが地上（宇宙）を人の手に委ねられた神のご意志なのではないかと小生には思えるのです。

## § 第 13 話　人は神の形に作られている

旧約聖書の創世記 1 章 26 節 27 節には「神はいわれた、『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」と記されている。これは神様が我々と同じ二足歩行の両手使いで、人間のような目鼻立ちの姿・形をしているという意味では勿論ない。「神のかたち」Imago Dei は、エリクソンという神学者によるまとめでは歴史的に３通りに解釈されてきたようである。１つは実体的見解といわれるもので、「神の性質を分け与えられ、知性と感情、意志をもつ存在であること。」とされ、一番オーソドックスで伝統的な解釈とされているものである。２つ目は関係的見解といわれるもので、「神と関係をもち、応答できる能力を指す。」とされ、神学者であるブルンナーやバルトに代表される解釈である。３つ目は機能的見解といわれるもので、「神の代理人としての統治権をさす。」という聖書の文脈に重点をおく理解である。

まあ、神学者の説明は分かり難いという方のために、例によって、小僧の分かり易い７０点解説を致しますと、「神の形」とは一言で言えば「神の心を知ることのできる者」、すなわち、善悪を考え、他者を愛する心、美しいものを美しい、悲しいことを悲しいと感じる感性を持ち、自らの行動を決める自由意志、そして工夫をしてものを作る能力が備えられた霊なる存在といえるように思います。ただし、人にはものを作る能力が与えられているといっても自然法則を利用した範囲のもので、神様のように無から有を造る能力は備えられておりません。人間が他の動物とどこが異なるかといえばこの「神の心を知ることのできる者」として造られている点ではないかと小生は思っています。

## § 第 14 話　生まれながら障がいを負った人のことを思えば やっぱり神様は不公平

　え!質問ですか。お答えできるかどうか分かりませんが何でしょう。
「生まれながらに障がいを持った人がいるけれど、このケースなどは、いわば呪われた存在のように世に送り出さたようにみえてしまう。神様はやっぱり理不尽ではありませんか。」 おっしゃるとおり、人生の出発点で既にハンディーを背負わされた人がいます。本人は一生そのハンディーを背負って人一倍の努力を強いられ生きていかなければなりません。確かに、人の目にはこれは不公平と見えてしまいます。その方の親にしても、生まれてきた子供が障がいを持っていた場合、その思いは如何ばかりでしょう。神様を呪いたくなるのも無理からぬことと思えます。この難しい問題については聖書にも記述があって、イエス様は次のように答えておられます。
「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。『先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。』イエスは答えられた。『この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。』」（ヨハネの福音書 9 章 1-3 節）
　弟子達は昔から言い伝えられているように「障がいは神の罰」に違いないと考えたようで、生れつきというのは本人の前世の罪が原因か、親 ( 先祖 ) の罪が原因の罰なのだろうかと疑問に思い、イエス様に尋ねたのである。しかし、イエス様の答えは「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」でありました。では「神の業が人に現われる」とは一体どの様なことなのか少し考えてみ

たいと思います。

さて、皆様は乙武洋匡さんという方をご存知でしょうか。氏が大学在学中に出版した自伝『五体不満足』は 500 万部を越す大ベストセラーになり、その後今日に至るまで相当数の販売実績を続けているそうである。先天性四肢切断（生まれつき両腕両脚がない）という重い障がいをもって生まれた方であるが、都立戸山高校を経て早稲田大学に進学する。大学時代に早稲田のまちづくり活動に参加し、このまちづくり活動を取材した NHK の番組出演がきっかけとなって、障がい者としての生活体験をつづった『五体不満足』を執筆することになったとのこと。氏は障がいを負っていることをものともせず「障がいは不便です。しかし、不幸ではありません」ときっぱりと明るく言い切る。これは軟弱な健常者である我ら凡人が圧倒されてしまうなんとすごいメッセージではありませんか。この様な氏の有り様を見て私は「彼の上に神のわざ（栄光）が現われている」と実感した。脚がないから歩けない。電動車椅子を使って移動しなければならない。この現実はどう見ても不自由である。にもかかわらず、本人はその事実を不幸と思って悲観するところがない。自らの障がいに目を背けることなく現実をあるがまま受け入れてそこから出発して居られる。そのように前向きに生きる姿勢の中で、負の遺産を持たされたと思える現実が見事にプラスの財産に変換されている。身体的には障がいを負わされているが、氏の人格、霊なる存在は至って逞しく、大きく成長して居られるのである。人はこの世においては体と霊（人格）とからなる存在であると申し上げました。そして、体は障がいの有無にかかわらずいずれ生物学的な死をもって朽ちていきますが、そのとき大事であることは人生において刻んだその人の像、すなわち霊（人格）であります。これこそが、神様の目から見た関心事であるのです。

勿論、すべての障がい者の上に神のわざが現われる訳ではありません。障がい者として生まれた我が子を見て親が悲観し、親が子に適切な愛情

を持って育てられなければ子供は健全に育ちません。最近育児ノイローゼから、我が子を殺害してしまうような不幸な出来事が頻発していますが、このような親の対応ではその人の上に神のわざ（栄光）が現われることはなく、悲劇を招くことになってしまうことでしょう。しかし、乙武洋匡さんの場合、親御さんの対応はいわゆる世間で言うところの障がい者への対応という感じでは全くなく、基本的に健康な子供として育てられたようで、何ともすごい親御さんであったと感心させられます。このことを氏自身「重度の障がいはあるけれど、まずは両親に恵まれ、先生方、地域の方々、そして友達に恵まれたからこそ、卑屈にならず、前向きに人生を歩んでくることができました。」と感謝して居られる。そして、氏は 2003 年に、長崎で起きた当時 12 歳の少年による園児誘拐殺害事件について「凶悪犯罪の低年齢化だ」「酒鬼薔薇の再来だ」といったものばかりの報道に対してすごく違和感を持ったと語って居られる。それは、「周りの大人たちは何をしていたのか」という視点が大きく抜け落ちてしまっているように感じたからと本質的な鋭い指摘をされている。子どもは大人や周りの環境で大きく変わっていくものだと気付いたときに、改めて自分はすごく恵まれてきたなと思い、自分が得てきたプラスの部分を、今度は僕から子どもたちの育つ環境に還元したいと教育者の道に進んだとのことです。負の事象と思える障がいが、その現実にきちんと向き合って懸命に生きるときその障がいは本人だけでなく周りにいる人々へも多くの学びと深い感動とをもたらせるものであること見せて頂きました。改めてこの人の上に神のわざが現われたと私には思えるのです。

「神の力は弱い所に完全にあらわれる」。（コリント人への第 2 の手紙第 12 章 9 節）

## § 第 15 話　新約聖書と旧約聖書

キリスト教には聖書という教典があることは、日本人によく知られているといって良いでしょう。その聖書には旧約聖書と新約聖書と二種類あることも周知されているようです。では、旧約聖書と新約聖書の違いはとなると旧約聖書は旧教（ローマカトリック）の聖書で、新約聖書は宗教改革によって生まれた新教（プロテスタント）の聖書であると思われている方が案外多いようです。しかし、それは間違いです。旧約聖書はキリスト教成立前の書物、すなわち、キリスト教誕生の基礎であったユダヤ教の文書なのです。これに対して、新約聖書はキリストの復活後にキリスト者によって書かれた文書がまとめられたものです。旧約とか新約という言葉が使われていますが、これは神とその民との間に結ばれた古い契約、新しい契約という意味を持っています。旧約聖書には全３９巻の文書が、新約聖書には全２７巻の文書が編纂・収録されております。旧約聖書は大きく分けてモーセ五書（ユダヤ教ではトーラと言う）、歴史書、知恵文学、預言書、旧約聖書続編からなっている。これらの書物はもともとユダヤ教の中で生まれたものであり、ユダヤ教、キリスト教ともに聖典としているが聖書としての構成は若干異なるとのことである。また、イエス様の時代に「ヘレニスト」と呼ばれた外国生まれのギリシャ語を話すユダヤ人たちが大勢おり、その人達のためにヘブライ語のユダヤ教文書をギリシャ語に翻訳した７０人訳聖書が存在し、初代キリスト教会ではこれを聖書として用いていたとのこ

とである。また、新約聖書については３９７年に開かれたカルタゴ教会会議で、新約聖書２７文書の正典化が決められ、西方教会で定着したと言われている。また、この２７巻には４つの福音書、初代教会の記録である使徒言行録、各地の教会宛などの書簡、黙示録とが収録されている。この２つの書物を聖書、すなわち、キリスト教の聖典とはっきり定められたのは４世紀乃至５世紀頃になってからではないか、それは聖書の多義性と各地に存在した複数の教会間の解釈の違いを解決し、神学的教義を統一するためになされたものであろうと推定されます。

ところで、キリスト教に何故、キリスト教以前のユダヤ教の書物である旧約聖書が必要なのかと疑問をお感じになる方があるかもしれません。それは、旧約聖書の文書には神に選ばれ、導かれつつも神に逆らった道を歩んできた古代イスラエル民族の歴史が、そのまま人間の有り様、生きる姿をみごとにモデル化して表現・記録されているためであり、それらの文書はイエス・キリストによる人間の救いの必要性と意味をその背景から理解する上で、極めて有効というより必須の内容であるからと小生は理解しております。ですから、キリスト者はこの旧約聖書の内容を単に古代イスラエル民族の歴史としてだけではなく、自らの生き方の軌跡を重ねて読み、学んでいるように思えます。

新約聖書には４つの福音書が入っています。福音書とはイエス様の御言葉、行動を書き記すことにより、ナザレ人イエスが本当にキリスト（救世主）であったと証言することを目的として書かれたものであります。このような福音書は聖書に収録されているこの４つだけではなく多数の人が書いており、他にも存在しておりました。そのうち、この４つが選定され聖書に入れられたと言うことになります。それぞれの福音書は各地の教会で選択的に使用されていたようでユダヤ人系の教会ではマタイ福音書が、異邦人系の教会ではルカ福音書が、マルコ、ヨハネは傍流教会で使用されていたといわれています。さて、その記述を比較してみると、同じ事柄を記

述している箇所が数多くあるのですが、少しずつ異なる内容となっています。愚かにも小生は若い頃、この相違点はどちらかが間違いであろうから、教会は違いを検証し修正して内容を統一したほうが聖書の信頼性が増してよいのにと考えたものでした。また、新約聖書の冒頭に編纂されている文書はマタイ福音書です。その書き出しはダビデの子主イエス・キリストの系図となっていて、アブラハムから始まる代々の人名が続きます。メシアはユダヤ黄金時代の王ダビデの末裔として生まれるというユダヤ社会の伝承に基づいて、ユダヤ人である福音記者マタイはナザレ出身のイエスがダビデの子であることを立証したかったのでしょうが、我々日本人には全く無味乾燥な記述です。キリスト教を学ぼうと聖書を手に入れ、せっかく読み始めたもののこの系図ですっかり興味が喪失され頁を閉じてしまった人が一体何人いただろうか。せめて、順番を入れ替えヨハネ福音書を冒頭に持ってくれば宣教的効果はよほど高くなるのにと考えたものでした。この考えはいまでも基本的に変わりませんが、人間的な思いで聖書に手を付けないと言う教会の姿勢も大事かなと思います。しかし、皆様にはこの箇所で躓くことなく是非先に読み進んで戴きたいと願います。

最近知ったことですが、２世紀当時、４福音書を基に統一折衷福音書を作る試みをした人がいたようですが、全教会的には受け入れられなかったとのこと。それぞれの福音書を大事にしている各教会がそれを認めなかったのであろうと推察されます。オリジナル文書に手を加えず、複数の文書を共存させたことは正しい選択であったと今では小生も強く思っております。それは例えば一つの事象を複数の人が見聞し、それぞれに記録を残した場合には、細かい点で記述が異なるのはよくあることというか、当然のことです。記録者はそれぞれの感性で事象を受け止め、それを記述しますから、強調点が少しずつ異なってくることは当然でしょう。一つの記述からはその事象について平面的な理解しか得られませんが、視点を異にした複数の記述があるということは、複数の記述を総合することによりその事

象を平面的にではなく立体的に捉えることができるという効果を生じます。その意味で、本来のイエス様のメッセージの趣旨が変わってしまう程矛盾していては困りますが、そのようなことはなく、むしろ、複数の福音記者の強調点が若干異なると言うことによって、読者である我々に豊かな読み方を可能にさせてくれていると感じています。

## § 第 16 話　最後の審判とは

神様は人を神の形に作り、自ら作られた地上（宇宙を含む全世界）すなわち、この世を人間に管理させるようになされた。この世に生を受けた人間はこの世の存在としての体と神の形としての霊とが備えられ、限られた時間与えられた状況の場でそれぞれの思いと決断を重ねつつ人生を歩むこととなるのですが、キリスト教には「最後の審判」といわれる教義があります。それは平たく言えば人生を終えて神の前に立たされたとき、その人が生きた人間であるか死んだ人間であるかの審判がなされるという内容です。死んでから立たされるのだから、当然皆死んでいるなどと単純に考えないでください。ここで問われる「生きているか、死んでいるか」という内容は生物学的な命ではありません。そもそもキリスト教が問題とする命とは生物学的な命ではなく、体は朽ちても本物の人間として朽ちることのない霊なる自己が確立できているか否かということです。

この最後の審判は日本人には子供の頃絵本で見たり大人達から聞かされた閻魔大王による極楽行きと地獄ゆきの裁きの話とイメージがダブるのではないでしょうか。昔大人から伝え聞かされた閻魔様は死んだ人間一人一人に「お前は生前どんな行いをしてきたか」と問うという話で、人生を総括し善い行いをしてきたか悪い行いをしてきたか天秤にかけられて判定され、善人は安楽な世界に送られ、悪人は釜ゆでや火に焼かれる責め苦に遭わされるという内容であったように記憶しています。かつての同僚が郷里で過ごした幼児期に、お寺の日曜学校に通い、和尚さんから地獄絵

を見せられ、悪いことをするとこの様な地獄へ送られるのだと聞かされ、子供心に「恐ろしい、悪いことはしないようにしよう」と思ったものと懐かしそうに話してくれました。キリスト教の中でもルネッサンス期に描かれたミケランジェロの作「最後の審判」（バチカン：システィーヌ礼拝堂のフレスコ画）では彼自身が皮一枚にされるというこれと似通った描写がなされていますが、聖書には地獄の責めを連想させる記述は見当たりません。ヨハネ福音書第５章、テモテへの第２の手紙４章、使徒行伝第１０章４２節などの記述からは最後の審判では裁く方がイエス・キリストであること、なされることはその人が生きているか死んでいるかの判定であると記されています。マタイ福音書第２５章 31-46 には人を羊と山羊とを分けるように、いと小さな人に援助の手をさしのべた者としなかった者に分け、いと小さな人にしたことはすなわち私 ( イエス・キリスト ) にしたことであるから、前者には永遠の命を後者には永遠の罰 ( 死 ) を与えると記されている。これは生前の行いの善し悪しが問われているように聞えるかもしれませんが、そうではなく、弱い者、小さい者の存在を心の中に受け止め、大事にする生き方をしてきたか否か（生きる姿勢）が問われていると考えられます。それが霊なる人として健全に生きていることを見分けるバロメータとされるということであろうと小生は考えています。

小僧の７０点解釈で少々乱暴にしかし分かり易く申しますと、この世の損得を考える人は権限を持った地位の高い人、お金持ちを大事にすれば、いつか自分にもその人からお裾分け、お返しが廻ってくる

とのさもしい期待が意識下にあり、視線をそちらに向け、こびへつらいます。反面、見返りの期待ができない貧しい者、小さい者の存在には関心が持てず、無視致します。そのようにこの世の損得を行動基準としている人は体と共に朽ちる世界でしか生きておらず、神と人とを愛する心をもった霊としての自己を育てていないことになります。要するに最後の審判では生み出され生かされた人生の過程で、「お前は朽ちることのない自分を育ててきたのか」すなわち、人生を通じて作り上げた自らの実存が問われるのだと考えられます。

## § 第 17 話　キリスト教の最大のお祭りはクリスマスではなく、復活祭である。

キリスト教が最も大事にしているお祭りはクリスマスと考えている日本人は多いと思います。しかし、キリスト教が最も大事にしているお祭りは実は日本人にはなじみの薄い「復活祭（イースター）」なのです。キリスト教はイエス様が金曜日の午後十字架の刑を受けて死に、当日を第一日目と数えた三日目の日曜日に甦って人々の前に現われ、地の隅々にまで福音を述べ伝えよと命じられたことによって、成立した宗教です。ですから、イエスの十字架の死と復活がキリスト教の中心的な出来事であるのです。クリスマスはキリスト（救世主）が世に遣わされてお生まれになったことを記念して喜び感謝する日です。ローマ帝国の弾圧下にあった初代教会ではクリスチャン達は命がけで信仰を守っておりましたのでクリスマスを祝う心のゆとりはあ

りませんでした。しかし、人目に触れぬところ（地下墓所であるカタコンベ等）で、クリスチャン達によって復活祭と復活を覚える日である日曜日の礼拝は厳粛に守られていました。クリスマスについてはコンスタンチヌス大帝によってローマ帝国の禁教令が解かれた後、祝われるようになったものですが、１２月２５日にイエス様が生まれたという記録は聖書にも他の文献にもありません。ルカによる福音書に記されたイエス誕生の記述では、その夜羊飼い達が寝ずの番をしていたとあります。パレスティナ地方の１２月２５日は極寒の時期であることから、羊飼い達が夜に野原で寝ずの羊の番をするはずはないのです。そもそもこの日は、ローマの「太陽神の祭り」の日であったのです。冬至を越えると日毎に日中が長くなることから太陽が力を増す日として選定されたとのことです。ではなぜ、この日をクリスマスとしたのか?それはローマに住むクリスチャン達が異教の祭りに誘惑されないように、教会がその日をイエス様の誕生日、クリスマスと決め、信徒を教会に集めたのだという説があります。太陽神の祭りには人が浮かれて集い、無礼講という不道徳な行為が横行していたため、心の弱いクリスチャンがその誘惑に負けないようにとの教会の教育的配慮からであったということです。まあ、そんなことであったかもしれないと、小生も推測しております。ところで、ロシア正教など東方教会では１月６日をクリスマスとして祝っています。因みに西方教会（ローマカトリック、聖公会、プロテスタント諸教会）では１月６日は三人の東方の博士がイエスを訪問した日（顕現日）として祝っています。

## § 第 18 話　　キリスト教の最大のお祭り復活祭

キリスト教において最も大事なお祭りである「復活祭」について話を致しましょう。教会が何故復活日を守り大切にするのでしょうか。それはイエス・キリストが十字架の死を経て復活されたことにより「罪と世と悪、そして死」に打ち勝たれ、私たち人間を罪と死から開放して下さったと信じて

いるからです。天地創造以来の長い歴史の中で、神様と人間との間にできてしまった深い溝、すなわち、神の形に作られた人間が神の思いを忘れ、与えられた知恵と自由意志を用いて富とこの世の権力、栄誉、その他の朽ちる世界の欲望に執着し、神から遠く離れた存在となってしまった状態、そこから人間を神様の下に引き戻すためには、その深い溝をわたすかけ橋を架けなければならない。そのための犠牲がイエス様の十字架であるという考えです。

この話を身近な例で考えて見ましょう。立派な人間に育って欲しいと願った親が息子を遠く離れた都会の学校に苦労して仕送りをし、通わせていた。ところが、その息子は誘惑の多い都会生活の中で悪い友達につかまり、放蕩に身をやつし周りの人に迷惑を掛ける困りものの存在となってしまった。しばらくしてそれに気が付いた親はどうするでしょう。まともな人間に戻って欲しいと願う親はまず、息子をしかり、ものの道理を説いて聞かせるでしょうが放蕩が身に染みついてしまった息子の改心は容易には期待できません。ショック療法をねらい勘当したりしても、厄介払いされたくらいに思いひねくれていくのが関の山。反対に今までのことは水に流すからこれからは真面目にやれと、親の寛大さを示しても、そのときだけごめんなさいこれからは真面目にやりますというでしょうが、親なんて甘っちょろいものよと舌を出すのが目に見えています。そのような状態に堕ちた息子が立ち直るためには、息子自身が過ちに気づき悔い改めて新たな歩みをする強い決意を持たなければ始まりません。親の単なる優しさ、単なる厳しさではなかなか通じるものではないと思います。息子に過ちを気づかせるためには親の子を思う気持ちが生半可でないこと、自ら犠牲を引き受けてでも息子を立ち直らせるのだという覚悟を息子に示すことが必要でしょう。最も有効な手立ては悪の道を進もうとする息子の前に我が身を挺して立ちはだかることではないかと思います。

イエス・キリストの十字架の死はまさに罪を重ねた人間に対する神様の

立ちはだかりではないかと小生は思っています。自らを弱い人間の姿に宿し、生身の人間としての死の苦しみを引き受けつつ贖罪の生け贄（神の小羊）となられた。その壮絶な姿を見て人は何を感じるでしょうか。この出来事の前に神の御心が何であるかに気づかなければならないでしょう。そして、イエス様の十字架の死は肉体の死をもって終わりませんでした。弟子達や多くの人々の前に復活の御姿を現されたと聖書は記しています。イエスに連なる者であるとしての権力者による処罰を恐れ、人目を忍んで家に鍵を掛けて潜んでいた弟子達は、自分たちの中に立つ復活された主イエスの姿を見て勇気づけられ、目が覚め、命の危険を顧みずイエス復活の証人となって宣教を始めたと聖書は伝えています。イエス様の生涯を考察するとき、弱い人貧しい人と共にあって人々に愛を説き、多くの人々に勇気と希望を与えたとはいえ、この世の人生は死刑という結末であり、どうみても成功した人生とはいえません。この愛の革命は失敗に終わったかに見えます。しかし、失望のどん底にあった弟子たちの中に姿を顕されたイエス・キリスト。この出来事によって、この世の価値観が打ち砕かれ、失敗が成功に、敗北は勝利へと逆転させられたのです。そして、この時、キリスト教が成立したのです。

死んだ人が甦るという現象はこの世の法則である自然法則からは、また、我々の常識からはあり得ないことであります。因みに、復活されたイエス様の有様は聖書の記述を見るところではこの世の生物学的な存在ではありませんでした。復活されたとはいえ、またもとの生身の人間としての生活

を再開なさったわけではありません。聖書の記述によれば４０日間にわたり度々人前に姿を現わした後、「再び来るまで世の隅々にまで福音を述べ伝えよ」と弟子達に言い残し昇天されたとある。復活という出来事はこの世の法則を越えた次元の現象であり、朽ちることのない霊なる存在は時間と空間というこの世の次元を超越したものであるということを心に留め、今日のお話しは一応終わりにしたいと存じます。

キリスト教信仰の核心はこの復活であり、イエス様は罪と死に打ち勝たれ、私たちの先駆けとして復活の初穂となられたとして教会はキリスト教の原点である復活日を最も大事な祭りとして祝うのです。

## § 第 19 話　人は神と富とに兼ね仕えることはできない。

「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。
あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。」( マタイ 6:24)

さて、人間にとって最も欲望をかき立てられる種は富ではないでしょうか。お金があれば衣食住に係る大抵のものを手に入れることができますから、誰しもがお金は欲しいとの思いをもちます。豊かな生活を望み職業を選択する際にはより給料が高い職種や職場にするのが人の常です。お金はこの世の生活になくてはならないものであり、教会といえどもお金なしには成り立ちません。実際、献金を集めて宣教活動、教役者や事務職員の給与、施設の維持管理、そして、貧しい私たちの教会では僅かしかできていませんが困窮者への救援、人道活動への支援などに使っています。

上記の聖書の教えは富（お金）が悪であるというのではなく、富（お金）は人が使うものであって、至上のものではないから、それに振り回され、隷属するようになってはならないということでしょう。しかし、頭でそのように理解できても、富（お金）への執着は欲望のパン種となって人の心の

中で膨らんでゆき、人の心を蝕んでゆきます。この世を安楽に過ごすにはなんといってもお金が最も便利で有効な保証となりますから、人は自分（達）のためにできるだけ富を蓄えておきたいという気になります。しかし、その気持ちには度が過ぎないようにたが（箍）を嵌めておかなくてはなりません。

人はお金が至上のものではないことをよく知っております。強盗に入られ、「全財産を差し出せ、さもなければお前の命をもらう」と脅されたなら、多くの人は命が惜しいので全財産を差し出すでしょう。ということは自分の命、この場合生物学的な命ですがこれはお金より大切、「命あっての物種」という認識を持っていることになります。しかし、この場合、全財産を放棄することにより生物学的な命を留保しましたが、その人の霊としての命が確保されたわけではありません。それはその後の、その人の生き様次第ということになりますが、まずは生物学的な命を留保し、自己実現の機会を担保したことで上記の選択は正解であるといえると思います。では、この自己実現（霊的な命）が生物学的命や富とどちらが大切かということになりますと、答えは簡単ではなくなります。我々並の人間にはとてもできないことですが、人間の社会には財産が自分のためのものではなく、多くの弱い人、小さな人のための使われるべきもの、彼らを守る上で必要なものであり、強盗などにあげてしまって良いものではないとして、自分の命に換えてでもその財産を守り抜くという崇高な人がいることも忘れてはなりません。キリスト教のメッセージは、「富よりも自分の生物学的な命よりももっと大切なものがある。それは神と人とを愛することである。」ということです。

「（いと小さき者の中にいる）私のために、自分の（生物学的）命を失うものは、それ（霊的な命）を救うであろう。たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失ったり、損じたりするならば、なんの益があるだろうか」（ルカ、９章、23-25：ただし、括弧内は小僧の加筆）。

蛇足ながら、この「神に仕えるか、富に仕えるか」の問題について小僧の７０点解説を致しますと、この問題は「あなたは宝をこの世に蓄えます

か天に積みますか」という問いに帰着するのであって、自分の重心（価値観）がこの世に置かれているときは富に隷属している状態であり、自分の重心を天に移している人は神様に従って生きる姿勢が自己実現に努めている状態ということになります。我々弱い人間には最も難しい命題の一つであるといえるでしょう。

## § 第 20 話　金持ちが天国に入るのは駱駝が針の穴を通るより難しい。

これも、富に関するお話しです。新約聖書（マタイ１９章 16 － 26 節）に書かれている次の話を聞いて下さい。

さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』」そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか。」イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

イエスは弟子たちに言われた。「はっきり言っておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」弟子たちはこれを聞いて非常に驚き、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言った。イエスは彼らを見つめて、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と言われた。

この青年、優しい心の持ち主であり、真面目な生き方をしている人物であると推定されます。旧約聖書に記されている律法を誠実に守り、神様から永遠の命を戴きたいと切望しています。モーセの十戒と「隣人を愛せよ」との申命記の律法を守りなさいとのイエス様のお言葉に、それは守っておりますと、自信を持っていえたのですが、「まだ何か欠けているでしょうか。」との問いに「もし完全になりたいのなら、行って持ち物をみな売り払い、貧しい人々に施しなさい。」とのお答えが返ってきて、ここでこの青年は躓いてしまいました。沢山の財産を持っていたためと聖書は説明しています。財産家である彼は、持っている財産の一部を人に分けることはできても全部上げてしまうことなどできない。自分を守り、支えているのは財産であるから、これを失っては自分の存在そのものが危うくなると考えたのでしょう。裕福な家庭で豊かな生活を満喫してきたこの青年には「持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。」とのイエス様の勧めは到底応えることのできない不可能な事柄としか思えなかったのです。

日々の生活に必要なものを備えている程度の財産しか持ち合わせていない小生のような庶民であっても、その虎の子の財産に執着致します。貧しい人、助けを必要としている人を見てもそれをぽんとすべて差し出す勇気はありません。まして、財産家にとっては尚更不可能と言うことになるのでしょう。イエス様は言われます。「金持ちが天の国に入るのは難しい。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」随分と厳しいお言葉です。青年は「隣人を自分のように愛しなさい。」との戒めは守っているとの自負心があるようですから、多分、なにがしかの財産を用い他者への慈善行為を心がけていたのでしょう。そのような青年を人々はなかなか立派な人物と評価をしていたものと思われます。そのため、弟子達は驚いて、この評判のよい人が救われないと言うのなら、一体だれが救われるのだろうかと疑問を発したのでしょう。

イエス様の答えは「それは人間にできることではないが、神は何でもで

きる」でした。皆さんはこのお言葉をどの様に解釈なさいますか。神の目から見れば弱者の存在を心にとめ、援助の手をさしのべる青年の姿は好ましいが、基本的に財産にしがみついて生活しているこの人は朽ちる世界に生きており、霊なる存在として生きていないため、永遠の命は育たないということになります。がっかりして、すごすごとその場から立ち去る青年の背中に注がれたイエス様のまなざしは決して「財産に執着するおまえは落第だ」と切り捨てるような冷たい視線では無かったと小生は推察します。人間の弱さを思いやり、それを乗り越えることのできないでいる人間をあわれみつつ、その現実にもかかわらず神様はおまえを見捨てない、救いの手をさしのべてくださるのだ。そのために私が遣わされたのであり、まもなく、十字架で人間の罪、神に従わず自らの欲の奴隷となっている躓きの贖いをし、復活を通してその実現の証を示すからというものであったであろうと小僧は感じています。「神様は何でもできる」とは、本来は滅びの道にある者も決して見捨てないで救いの道を示してくださるということだと思います。

## § 第 21 話　クリスチャンは何故毎週日曜日に教会へ行くのでしょう。

クリスチャンでない日本人から見ると、クリスチャンはどうして毎週日曜日に教会へ出かけるのか、不思議に思われるようです。小生も友人達から日曜日の企画に参加しないかと誘われましたが、よく、NEVER ON SUNDAY（日曜日はダメよ）とつれない返事をしてきました。「私なんぞお寺さんに行くのは親族の法事の時くらい、墓参りも親の命日にたまに行くだけだぞ。君は何で毎週毎週教会にいかなくちゃならないのだ。」とよくいわれたものです。そんなとき、「罪が深いから、毎週懺悔に行かなければならないのさ。」と冗談半分に答えてきました。

クリスチャンが日曜日に教会へ行くのは前にも触れましたが、第 1 には主イエスの復活された日を記念し、信仰者が共に集って祈るためといえる

でしょう。神様はどこにでもおられるのだからわざわざ教会に出かけなくても各自の場所で祈れるじゃないかと思われるかもしれません。確かにそのとおりではあるのですが、一人で祈るのではなく、信仰者が共に集って祈り、聖餐に与るということが大事なのです。また、第２には一週間働いたら一休みして自分を取り戻す時とするためです。６日働いたら１日休むという習慣は旧約聖書の創世記にある天地創造物語で、創造の作業の過程において「神は７日目に休まれた」との記述に基づいたユダヤ教の習慣でした。ユダヤ教の安息日は土曜日ですが、キリスト教では主イエスが復活された日曜日を主日と決め、この日は神を思い自分を取り戻す日としています。ユダヤ教の安息日（安息日を聖として忘れてはならない：十戒）もキリスト教の主日も人は働きずくめで自分を見失ってはいけないので、働きを休止して神を思う日を持つべきであるという趣旨で一致しているといえるでしょう。

　では、クリスチャン達は日曜日に教会に集まって何をしているのかといえば、まずは第一に礼拝を行っているのです。礼拝とは一言で説明すれば参集者が共同でおこなう祈りであるといえると思います。私たちの聖公会やローマカトリックでは聖餐式（ミサ）が中心の礼拝であり、プロテスタント教会ではみ言葉を学ぶ説教が中心の礼拝となっていて、若干その形態が異なります。聖餐式（ミサ）は前半が御言葉の礼拝、後半がパン裂き（聖

なる食事）の礼拝という構成が採られています。御言葉の礼拝ではその日のテキストとなっている旧約聖書と新約聖書（使徒書と福音書）が読まれ、大抵はそれを題材とした説教が語られます。パン裂きの礼拝は、主イエスが捕らえられる直前の最後の晩餐の時に、「パンを裂いて分け与え、葡萄酒の杯を回してこれからは私の記念としてこれを行ないなさい」（ルカ：22章19節）と言われたことを伝承するもので、本来的に共にする食事です。パンはキリストの体を、葡萄酒は罪を赦すために流されたキリストの血を象徴しているとここでは説明しておきます。「象徴」などという説明は間違っていると神学者に叱られてしまうことでしょう。聖別されたパンと葡萄酒には真実なる臨在（real presence）があると信仰者には認識されており、その本質はキリスト教の奥義に係わる部分であります。門前の小僧が皆様に正しく説明できる内容ではありませんので、「象徴」という表現でお許し下さい。

聖餐式（ミサ）において参列者は御言葉の礼拝で福音を学び、共に祈り、生活（思いと言葉と行い）での過ちを懺悔をし、神の赦しと聖餐に与って、それぞれの持ち場（生活の場）に送り出されるというプロセスとなっています。前回お話しいたしましたようにキリスト教では単に罪を赦されて終わるのではなく、主日礼拝でリフレッシュされて回復された人がそれぞれの持ち場に帰って自分の務めを果たすことで神の心に適う社会（神の国）が実現されると教えています。小僧の７０点解説をいたしますと、礼拝を通して生きるエネルギーを戴いたキリスト者は６日間自分の持ち場へ出向いて働き、７日目にまた教会へ戻ってきて充電をして頂くというサイクルが生活リズムとなっているのです。

## § 第 22 話　イエス様は言われた「わたしもあなたを罪に定めない」と

聖書（ヨハネ 7 章 53 ～ 8 章 11 節）の記述をお聞き下さい。

人々はおのおの家へ帰って行った。 イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、

だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

当時ユダヤ教の指導的立場にあった律法学者たちやファリサイ派（パリサイ派）の人々は、ユダヤ教社会では何の権威ももたないナザレ人、すなわちガリラヤ地方のナザレ村出身の田舎者であるイエス様が人々に神の国の話をし、民衆が熱心にそれに聞き入って評判となっていることをねたみ混じりに怪しからんことと苦々しく思っていたのです。そこで、罠に掛けてとっちめてやろうと企んで、この場面を仕立てたのです。姦通の現場で捕らえられた女を引きずってきました。モーセの律法によればそのようなふしだらな女は石打の刑罰に処すべしと定められています。イエス様が石打の刑は残酷だから控えなさいといえば、モーセの律法を守らない偽教師といって非難し、訴えを起すことができます。もし、律法にあるとおり石打を実行しなさいと言って促せば、女は血だらけとなって悲惨な姿を人々の前にさらすことになります。そうすれば、この人は冷酷な人間とみられ、民衆の評判を落とすことができると目論んだのです。どっちを選択してもイエス様をとっちめることができるはずの罠でした。

しかし、「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた」と記されています。要するに、まともに応えようとはしなかったのです。せっかくしかけた罠、うやむやにされては元も子もありませんから、律法学者、ファリサイ派の人々はしつこく食い下がります。そこで、イエス様は言われました。「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」と。これは人の良心に問いかける言葉です。姦通をした女は怪しからんという思いは人々の心にあったとしても、神の前に立って私はこの女を責めることが出来る清廉潔白な人間ですと胸を張っていいきれる者などいないはずです。さすがに誰も石を投げられませんでした。人々は恥ずかしくなって一人また一人と現場を去っていき、罠をしかけた律法学者、

ファリサイ派の人々も具合が悪くなり退散したのです。

イエス様と、真ん中にいた女だけが残されました。この姦通の罪を犯した女は人々の前に引きずり出され、どんなにか辱しかったことでありましょう。時間がたつに連れもうどうにでもしてくれと開き直っていたかもしれません。しかし、成り行きは意外な方向に進展します。石を投げつけるはずの人が何もせずに去っていったのでした。そのときのイエス様の言葉は、「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」「わたしもあなたを罪に定めない。」という赦しの宣言でした。更に、「行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と締めくくります。

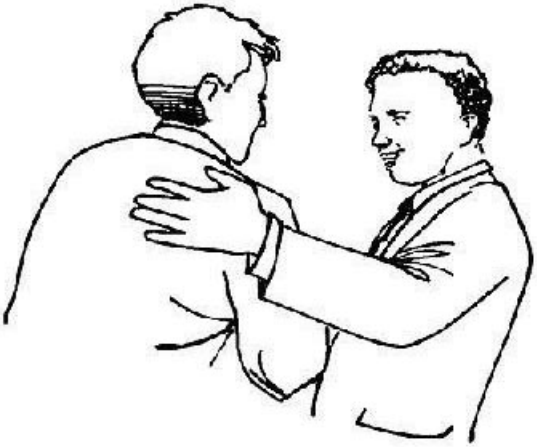
イエス・キリストによる罪の赦し、それは犯してしまった罪を赦す（わたしもあなたを罪に定めない）というだけではなく、一歩進んで赦された者に赦された今の気持ちを忘れずに新しく健全に歩むこと（行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。）が促されております。この女性の後日談は聖書に記されておりませんが、この人が赦され、励まし送り出されたこの出来事はこの人のその後の生き方を大きく変えたであろうことは想像に難くありません。

私たちも犯した罪を神様に赦して頂きながら日々を歩んでおりますが、ただ赦して頂くだけでなく、赦して頂いたことへの感謝の気持ちをエネルギーとして、自らが置かれた場において赦された者に相応しい新しい歩みを進めることが求められているのだと思います。

## § 第 23 話　「赦す」ということ

前回のテーマ「赦し」についてもう少し掘り下げて考えてみたいと思います。キリスト教では「赦す」という行為を重要なことと教えています。第４話でご紹介しました主イエス自身が教えられた「主の祈り」の中にも「わたしたちの罪をお赦し下さい。わたしたちも人を赦します。」とあります。赦すという行為は相手から何らかの不適切な行為を受けたという事実があ

り、それに対応するものといえるでしょう。神様に対して犯した罪があるから、わたしたちはこれを赦してくださいと祈るわけであり、人から嫌なことをされた事実があるから私はそれを赦しますと宣言するのです。イエス様の直弟子であったペテロが「兄弟が私に対して罪を犯したならば何回赦すべきでしょう。７回までですか?」とイエス様に尋ねたとき「７回どころか７を７０倍するまでも赦しなさい。」（マタイ 18：22）とのお答えが返ってきました。７回も赦すと言えば褒められるとペテロは考えたのかもしれませんが、お答えはそれを 70 倍するまででした。これは 490 回まで赦しなさい、491 回目からはもう赦さなくてもよいといって居られるのではなく、無限に許しなさいという意味であると理解すべきでしょう。



しかし、私達は日々の生活の中で起こる残忍な凶悪犯罪、弱い者や正直者を食い物にする卑劣な行為等、赦し難い出来事、怒り心頭の出来事、また、他者からひどく傷つけられるという出来事に遭遇します。そのような場合「不適切な行為」を行った相手に対し、私達は、寛大に「あなたを赦す」という宣言はなかなかできるものではありません。まして心から謝罪していることを確認できないところでは赦そうという気になかなかなれません。たとえ、一方的に「赦す」と宣言しても心が通い合わない限り両者の間で和解が成り立つことはないでしょう。傷つけられた人にとっては、たとえ口先で謝ってもらっても自分が受けた痛みを理解していない人と心を通わすことは不可能のように思えます。

にもかかわらず、イエス様は自分に罪を犯した人を無限に赦しなさいといわれます。赦し難いというわれわれの思い、怒りはどのように収めることができるのでしょうか。主の祈りから「赦し」ということを考察すれば、まず、「私たちの（神様に対して犯した）罪をお赦しください。」とあり、それに続いて「私たちも（私たちに対して罪を犯した）人を赦します。」となっています。つまり、不完全な存在である人間は神様に赦されてその存在を認められていることを踏まえ、「あなた方人間は不完全であることを互いに赦しあいつつ相手の存在を認め、共に生きなさい」といわれているのだと理解されます。両者の間には「不適切な行為」があったにもかかわらず、それを乗り越えて互いの存在を受け止めあう関係になりなさいということでしょう。しかし、前述したように相手の謝罪のないところでは人間関係における和解は成り立たない、心から赦すということもできないのが人間ではないでしょうか。イエス様がいわれた「赦しなさい」という勧めは一足飛びに「赦し、和解しなさい」と命じられているのではなく、赦せないから、憎らしいからといって自分の中から相手を抹殺してしまうことなく、その存在を受け止め続けなさいと言われているのではないかと小生には思われます。なされた「不適切な行為」に目をつぶること、それを水に流して無かったことにするのではなく、事実をきちんと踏まえた上で、罪を犯した相手を自分の友、兄弟として受け止め続けなさいということだと思います。人を赦すということは自分の中にその人の存在を受け入れることであろうと私は思うのですが、それはその人を愛するということと同じことであり、私達には極めて困難なことであります。

しかし、もし、罪を犯した者が愛する人、例えば自分の息子であったとしたなら、その人はその息子にどう対処するでしょうか。犯した罪に気づいて悔い改めて欲しい、罪を償って、まともな道を歩んで欲しいと願うでしょう。言って聞かせて分からなければ、殴りつけてでも目を覚まさせ、必死に気づかせようとするであろうと思います。切り捨てることなく当人に罪

を理解させ、悔い改めて新しい生活を歩ませるための支援を一生懸命にするであろうと思います。まず私達に求められることは、すぐに赦す気になれなくても向き合い相手を受け止めることではないでしょうか。

私たちが生きて生活できている原点は、自分ではとれない責任をイエス様が代わって十字架に担ってくださり、罪深い自分をまず神様に赦して頂き、存在を受け入れて頂いたことに始まるとキリスト者は考えます。私たちが赦され、存在を認められた代償に十字架上でイエス様の血が流されました。赦すという行為には両者の間で苦しみを共有するという現象を伴うものなのだと思います。私たちも、人を赦す立場に立つときは犠牲を引き受けることが必要となるはずです。罪を不問にするのではなく、罪を犯されたにもかかわらず、その人を受け入れるためには、愛するためにはその人の気づきと悔い改めへの支援と努力が求められます。そのことが無くしてお互いの和解という状況に至ることは出来ないのではないでしょうか。そして、私たちはしばしば知らず知らずに加害者となっているという逆転した関係になっていることにも気づかねばならないでしょう。

私達が傷を受けた場合には自分を守るためだけでなく、共に生きるために相手にそれを伝える勇気を、訴えを受けたときにはそれを謙虚に聴く勇気をもち、そして、問題に気づいた人は当事者を断罪するのではなく、互いに理解し許し合えるように支援する努力をしたいと思うものです。神様に赦されたもの同士が共に生きるために。

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」 ヨハネ13：34

## § 第 24 話　わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。

標記の言葉は、イエス様が徴税人マタイの家で彼と一緒に食事をしていたとき、ファイサイ派の人がイエス様の弟子に「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか?」と問うた場面でのイエス様の答えであり、それは「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく、病人である。‥‥わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マタイ９：12 － 13）となっています。人をさして罪人という言い方もないものだと思いますが、ファイサイ派の人から見ればモーセの律法を公然と守らない人たちは罪人と言うことになるのでしょう。

徴税人ですが、当時のユダヤはローマ帝国に支配されており、税金はローマに納められるものでしたから、その手先となって税金を集める徴税人は国粋主義者からは「敵の犬」だという蔑みの目で見られていました。しかも、徴税人は正規の税金の他にプラスαを巻き上げ、私腹を肥やしているのが常でしたから、民衆からもひどく嫌われていた存在であったのです。そんな人たちと一緒に食事をしているイエス様を頭の固いファイサイ派の人は怪しからんと赦せなかったのです。聖書に出てくる律法学者やファイサイ派の人々はいつも、イエス様に強い反感を抱き、イエス様も彼らを「蝮の末よ」とまでいって批判しています。ですから、聖書を読む私達は彼らが腹黒い人間だったのだと思いがちですが、実は、極めて真面目な人間であったのです。モーセの律法をしっかり

と学び、頑ななまでにそれを実行していた人たちで、人々からは謹厳な立派な人間と一目置かれていた人たちです。ただ、その努力の故に自分は人よりましな人間、神様からよい評価を受けられる資格があると自負していたのです。その思いこそが、神様から遠い存在、救いがたい存在となっていることをイエス様は指摘したかったのだと思います。

このマタイという徴税人ですが、他の徴税人と違って税の上乗せなどしない心正しい人であったとは思えません。ピンハネで私腹を肥やしてきた徴税人の一人であったと思われます。人から蔑まれる存在である故に、自分を蔑む人間から取れるだけの金を取って、せめて贅沢な生活を楽しんでやろうと開き直った人生を歩んでいたことでしょう。しかし、彼はファリサイ派の人と異なり、自分が神様の前に正しくない者、罪人であることを自覚していました。人たちから軽蔑と憎しみの視線しか向けられることの無かったマタイを、イエス様は一人の人間として受け止め、優しいまなざしを向け「わたしに従いなさい。」と声を掛けられたのでした。このとき、マタイには、いままでの人生観・価値観が 180 度ひっくり返される激震が走ったと推定されます。「マタイは立ち上がってイエスに従った。」と聖書はごく簡単に記載していますが、これが徴税人マタイとイエス様との劇的な出会いであったのです。マタイの不行跡が妨げとならないで、マタイの砕かれた自我がイエス様の招きを素直に受け入れる結果を生んだのです。

人々から立派な人間と評価され、尊敬を集めていた律法学者やファイサイ派の人々は、神様から他者よりよい評価を受けるべき人間であるとの思いがありますから、イエス様の招きの必要など感じられません。しかも、このナザレ人はいかがわしい偽教師だとの目でイエス様を見ていますから、出会いなど起こりえないことになります。自分は健康である（罪がない）と思いこんでいるところにその人の病気（罪）があるということでしょう。

この話、日本人には歎異抄にある「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という親鸞上人の言葉、悪人正機説に通じると思われる方が

多いのではないでしょうか。親鸞上人は若い頃比叡山で修行を積み優秀な僧侶として高い評価を受けていたが、自分の中に平安が得られず、悶々としていたとき法然上人と出会い「南無阿弥陀仏」の念仏で平安を得たと聞いています。一切を無にして阿弥陀仏に帰依する思いの中で平安が得られたという実体験は、学問や修行を積むことによってではなく、自らの中には誇るべきものは何もないとの「砕かれた自我」の心で神（仏）と向き合うことによって、真の出会いが起こり、平安が得られるという宗教的真理を伝えているようにわたしには思えます。

前にも述べましたが、イエス様の宣教第一声は「悔い改めて福音を信じなさい。」でした。悔い改める心、すなわち、自分の能力に頼って生きようとする姿勢を改め、神様に聴き従って生きることが神様の招きに応じる姿勢であろうと思います。

## § 第 25 話　日本におけるキリスト教宣教

日本のキリスト教（ザビエル時代に遡るローマカトリック教会を除く）は 2009 年の今年、宣教 150 周年を迎えました。1873（明治６）年に禁教令が解かれて一応合法的にキリスト教宣教が許されるようになるのですが、それより少し前、1859 年に米国人宣教師ウイリアムズ師が長崎に上陸した年から数えて 150 年が経ったわけです。この間、キリスト教会は福音（神様のよきメッセージ）を日本人の心に届くようにちゃんと伝えてきたであろうか。このことを反省しつつ検証してみると、今日キリスト教について日本人に周知されていることといえば１２月２５日のクリスマスくらいなものであって、それもイエス・キリストの誕生を祝うキリスト教の祝日であることは知られているものの、子供達にはサンタクロースがプレセントを配り、人々はクリスマスケーキを食べ、お互いにプレゼントを交換するという社会習慣のみが取り入れられ、宗教的意味とは無関係にクリスマス商戦としてだけ日本社会に定着している感があります。この現実はキリスト教会

が述べ伝えるべきメッセージを日本人の心に届く形で伝えてこなかったことを実証しているように小生には思えてなりません。

明治初期より欧米諸国から沢山の宣教師が日本に定住し、キリスト教の種がまかれました。彼らは欧米の先進科学、文化、医療、教育を共に携えて宣教に励みました。人は心と体とからなるもので、体の健康と生活環境が整わないところでは心の健康も得られないとの信念があったものと解されます。日本政府は、鎖国による文明の遅れを回復し、欧米諸国と肩を並べる国力を持ちたいと富国強兵政策をとりますが、そのために進んだ欧米の先進科学・産業技術を学び取り入れることが優先されました。進んだ文明を吸収するため、また外交面からもキリスト教禁教令の撤廃は必須でした。しかし、本音は富国強兵政策を進めるためには外国からの宗教は入れたくない、天皇を中心に日本人を一つに纏める独自の宗教を確立したいとの思いがあったのです。そこで、神仏混淆状態にあった既存の日本の宗教に対しても、明治政府は神社から仏教的な要素を排除する「神仏分離」政策をとり、天皇の先祖である皇祖（天照大神）を最高神とする国家神道を造り上げ、国家神道は諸宗教に優先するものとして広めました。その流れの中で和魂洋才政策がとられたのでした。太平洋戦争の時までキリスト教に対して表立った弾圧はありませんでしたが、耶蘇教は欧米のバタ臭い宗教とのレッテルが貼られていました。内村鑑三不敬事件は戦前の日本におけるキリスト教の置かれた状況をよく象徴していると思われます。明治 23 年教育勅語が発布され、文部省はその謄本を全国の国公私立の学校に配布し、勅語への拝礼（敬って頭を深く下げる行為）を指示しました。当時第一高等中学校の嘱託教員であった内村鑑三は、拝礼が皇祖皇宗を更には天皇を神とする行為として、偶像崇拝を否定するキリスト教の信念に従い、軽く会釈する程度の敬意を表するにとどめたところ、生徒および教員の一部から、この内村の行為は皇室に対する不敬であるとの非難が発生し、マスコミからも「不忠の臣」「外教の奴隷不敬漢」との批判を

浴び、結局学校を依願退職させられたのでした。このような社会的逆風が吹く中でのキリスト教の宣教は容易に進展しなかったのであろうと推察されます。しかし、原因はそれだけではなく教会の宣教姿勢にも不十分な点があったように思われます。前述したような日本社会の風潮があったにせよ、キリスト教会として、バタ臭いなどと思われない日本人向けのメッセージの伝え方をする工夫に欠けていた、メッセージが宣教師たちからの受け売りで日本人の心に届く言葉に直して発信しなかったのではないかと推測されます。また、「聴く耳ある者は聴け」といった姿勢、教会の門をたたいてくる人を受け入れるだけで、積極的に町へ出て宣教するという姿勢に欠けていたのではないか。結果的にキリスト教は一部のインテリ層に浸透しましたが、市井の日本人からはバタ臭い外国の宗教という目でみられたまま浸透することはありませんでした。

しかし、終戦後、事情は一変し、日本国憲法の下で「信教の自由」が実質的に認められ、自由な宣教が可能になりました。この時期は小生の幼児期に当たりますが、教会には多くの人々が出入りし、熱気を帯びていました。日本が戦争に負け、今までの価値観が壊されて混乱する中、新しい価値観と自由を求めて人々は教会へ集ったと思われます。ところが、キリスト教会はこの状況下でも日本人の心に届くメッセージを発信できなかったのでしょう、次第に教会へ来る人の数は減り、終戦から 10 数年も経つ頃には以前の落ち着き?を取り戻していったのでした。国民生活が安定するに連れ教会への関心も薄らいでいったのでしょうか。この 150 年間、毎日曜日教会では熱心に説教が語られ、祈りが捧げられてきたにもかかわらずそのメッセージは一般社会で生活している多くの日本人の心に届くことはありませんでした。この現実は日本のキリスト教会の大きな反省点であると思えます。

生活は豊かになる一方で、価値観は多様化し、人間関係が複雑化し、一種の混乱状態になっているともいえる現在の日本社会において、人に生

きることの大切さ、その意義を学ばせる宗教の役割は益々重要になっていると思うのですが、自然科学が万能であるかのごとき錯覚に陥っている多くの日本人は宗教的音痴になっているように思えます。門前の小僧の分際で生意気なことを言うなとのお叱りの声が聞こえてくるようですが、怪しげな宗教に人が集まり、大きな社会問題を起こしている状況を見ればそう思わざるを得ません。これらの事象がますます宗教とは危ないものだとの不信感を日本社会に抱かせてしまいました。門外漢の小生ですが、鎌倉時代の日本の仏教は高い宗教的レベルを備えていたと思われることから、決して日本人は本来的な宗教的音痴ではないと思われます。今の状況は、混乱の中にある日本社会に対して人々の心に届く形でメセージを発信していないというキリスト教会を含めた宗教界の責任であろうと思えます。

市井の日本人にメッセージを届けようと街中に繰り出し、路傍説教をして宣教するという手法は今日の日本においては現実的ではありません。人々は目的を持って街を忙しく行き来していますから、うるさいと感じるだけでその人の耳にメッセージが届くことは難しいでしょう。今の日本社会には、インターネットを使った通信ツールが確立されており、多くの人がこれを生活の道具として使用するようになりました。その危険性にも配慮が必要ですが、この伝達方法のよい点は人への押し付けがないことでしょう。日本人には宗教への関心があっても、関心を示すとすぐに信徒にさせられてしまうのではないかという不安や、警戒心が先立って宗教には近づかないという傾向が強い様に思われます。その点関心のある人が気兼ねなく見ることができ、見たくない人は遠慮なくスイッチを切ればよいというインターネットツールは真に便利な道具です。既成の宗教の布教手法に飽き足りない若い宗教家の方々がこのツールを使って様々な試みをされていることは喜ばしいことです。キリスト教会にもこのツールを用いた宣教が大事であると思う人が多くおられ、ホームページやブログで説教等を沢山発信しておられるのですが、生の神学は教会用語も多く市井の日本人には解かり

にくい内容であるように思えます。150 年間の日本におけるキリスト教宣教を振り返るとき、バタ臭さを感じさせることなく日本人に分かりやすい話を発信することの必要性を強く感じます。普通の日本人にキリスト教のメッセージを届けるためには正しいキリスト教のメッセージを発信する神学者や聖職者と普通の日本人との間をつなぐ媒介（インターフェース）として役割が重要となるのではないか、それを担うのは世俗社会で生活している信徒の責任ではないかとの思いから、小生はこの門前の小僧の辻説法を発信し始めた次第です。できるだけ多くのキリスト教信徒の方々にこの媒介としての働きを共に担っていただきたいと願っております。

## § 第 26 話　世の光、地の塩となりなさい。

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」（マタイ福音書 5：13 ～ 16）

これは、イエス様が人里離れた山の上で弟子達に語った教え、「山上の

説教」として福音記者マタイは伝えています。語った相手は弟子達とありますから、イエス様は神様の導きに従って歩もうとする者への心構えをこの言葉で示されたと解されます。あなた方は社会に味を付けなさい。あなた方は光となって世の中を照らしなさい。といわれても、はたしてわれわれ人間は味を出す素や、世を照らす光の源など持ち合わせているのだろうかという素朴な疑問が起こります。自己研鑽に務め、豊かな心を育て、円熟した心で人々と接することによりあなた方の味を出しなさい。沢山勉強し、一生懸命に研鑽を積み、豊富な知識と力を備えた聡明な人間となって世の闇を解明しなさいと弟子達を叱咤激励されたのでしょうか。どうもそうではないと思われます。そもそも、イエス様の弟子達は律法学者やファリサイ派の人たちのような知識人ではなく、多くは無学で素朴な漁師達でした。無学ではあっても純真であることに可能性を認めて弟子とされた彼らに向かってイエス様がしっかり勉強し、尊敬される立派な人間となってリーダーシップを発揮しなさいなどと言われるはずはないのです。上記の心構えとはむしろ個人プレーで自分の色や味を出そうとするのではなく、ただ神様の導きに従って働き人として素直に行動しなさい。それはあなた達のような自尊心をもたない素朴な人間にこそできることです。与えられた自分の賜物を用いて自然に振る舞うことが神様の愛を周りの人に伝え、社会の闇を照らすことになるのです。あなた達は光の子としてすでに神様の光源につながれ、光を分かち与えられているのだから、自分で味を出そうとか光輝こうなどと頑張る必要はないのであって、ただ、恥ずかしがったり、面倒くさがったり、臆したりしないで、導かれる通り素直に行動しなさいといわれているのだと思います。

ですから、「あなたがたの立派な行いを見て、」あなた方は立派だとの人々からの評価を得るのではなく、「あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」ということになるのだと思います。自分たちが出す味も周囲を照らす光も自分の中から出て放たれるのではなく、それらの根源は神様

の導きの中にあるということをしっかりと心に留めておくことが重要でしょう。

私達の教会（聖公会）が古くから用いてきたお祈りをご紹介しましょう。

「神よ、私達はあなたの導きによらなければ何一つ良いことをすることができません。
どうか聖霊によって私達の心を収め、常に導いてください。
主イエス・キリストの名によってお願い致します。　　アーメン。」

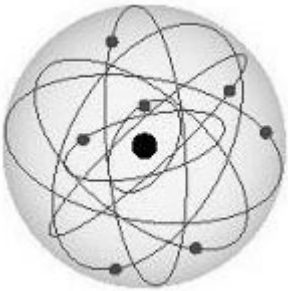
「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（ヨハネ８：１２）

## § 第 27 話　自然現象に神の業を見る

前回、「世の光となりなさい」という主イエスのみ言葉について考えました。今回は一寸横道にそれるかもしれませんが、光るという「発光現象」に着目し、光はどのようにして放出されるのかを考えてみたいと思います。小生は学生時代あまり真面目に勉強したとはいえませんが、物理学を専攻しました。社会人となってからはその基礎知識をベースに自然法則を利用した技術的思想の創作、つまり発明を扱う特許の世界に身を置いて歩んで参りました。自然法則、自然現象を対象とした研究結果を扱う仕事に携わる中で、自然現象に神の業を垣間見たと感じて深く感動した経験がありました。それは物質が光る「蛍光」という物理現象でした。その現象に着目しているうちに「あれー、これは人が輝いて見えるという現象と同じメカニズムだ」と思えたからです。このような自然現象、あるいは動物たちの姿・形や行動などを観察しますと私達が生活しているこの世界は実に見事に創られていると感心してしまいます。後者については動物の進化や自然淘汰の結果だとして簡単に片付けてしまう方も居られますが、小生はとてもそれだけとは思えず、うーん見事に創られていると感じ入ってしまいます。

さて、物質が光るという「蛍光」現象ですが、まず蛍光体の発光メカ

ニズムを簡単にご説明しておきますと、蛍光は母体結晶の中に散らされた発光元素の働きによって起こります。発光元素の中心部には原子核があって、その原子核の周りを電子が、ちょうど太陽の周りを惑星が公転するように軌道を描いて廻っていますが、その軌道は１つではなく、水星の外側を金星が、更にその外側を地球がというように



エネルギーレベルを異にした軌道が複数あります。元素の種類によって周りを巡る電子の数と、軌道毎に存在できる電子の数は決まっています。電子が低いレベルの軌道から順に詰められた形態で収まっている状態を基底状態と呼び、その元素の最も安定した状態であります。ところが、この元素に外部からエネルギー（蛍光現象の場合は主として紫外線域の光）が与えられますと電子は元の場所にじっとしていられなくなって、自分の居た軌道より上のレベルの軌道に飛び出していきます。このような元素の状態は活性化された態様であり励起状態と呼ばれます。上位のレベルの軌道に飛び出していった電子は暫くすると元の低いレベルの軌道に帰ってきますが、この際に　ｅＶ＝ｈν　という関係で光を放出します。位置エネルギーを光のエネルギーに変換して放出するのです。上式においてｅＶとはエレクトロンボルトすなわち、エネルギー量を表します。ｈというのはプランクの定数と呼ばれ、一定の値です。νは放出される光の波長を表します。光の波長とは色に対応するものと理解してください。因みに可視光の領域で長い波長の光は赤、短い波長の光は紫となります。高いレベルの軌道と低いレベルの軌道との位置エネルギーの差がｅＶとなるのですが、各軌道の位置エネルギーは、それぞれの元素の種類毎に決まっているため、元素は自分特有の波長νの光を蛍光として放出します。ですから放出された光の波長（色）の分布を解析すればその元素が何であるのかが分かる

のです。

少々理屈っぽくなってしまって済みません。ここで、着目して頂きたい現象は、基底状態にある元素は極めて安定していますが、決して光を放つことがないのに対して、励起状態の元素は活性化された状態にあり、電子が飛び出し／戻る過程でその元素特有の色の光（蛍光）を発することになることです。

人間について考察しますと、周りの環境で起こる出来事に関心を示すことなく、自分の居場所にじっとしている人は危険に遭遇することもなく、本人は極めて安全でありますが、決して人々を喜ばせたり励ましたりすることはありません。これに対して周りの環境で起こる出来事に関心を持ち、出かけていって一働きした後に本来の自分の居場所に帰ってくる人は、その経験した出来事を周囲の人に伝えることとなり、社会に味をつけ、光を放つことになります。小生は蛍光という物理現象に着目する中で、人間も生きている以上基底状態ではなく、活性化された励起状態でいないとならないと感じると共に、この物理現象はそのことを見事にモデル化し教示していると感動したのでした。この現象において、光を放つための 1 つの重要なポイントは電子が元の低いレベルの軌道にちゃんと帰ってくることです。鉄砲玉のように飛び出していったものの、すぐに他に目移りがして余所にいってしまい自分の本拠地の定まらない人の働きは、そこで経験した出来事を周囲の人に伝えることに繋がりません。そして、自分の居場所に戻った電子は軌道のレベル差に対応した特有の色の光を放つことになりますが、人間においてはまさにその人の個性が反映された味となり光となって周囲に影響を及ぼします。そして、光を周りに放出する現象を起させるエネルギー源は元素の中から出てくるのではなく、外から与えられる励起光であることは、人間において外に働きに出かけるためのエネルギー源は自分の中から湧いてくるのではなく聖霊の導き（神様の呼びかけ）であることに対応していると私には思えます。このように人が世の光とされるメカニ

ズムは物質が光を放つ現象の中に見事に対応しモデル化されているように小生は感じましたが、皆様はどう思われますか?

## § 第 28 話　　宗教はどれも同じなのでしょうか?

宗教は山登りと同様、目指す目的地（頂上）は皆同じで、そこへたどり着く道が違うだけだと言われる方がよく居られますが、その意見に小生は俄には賛成致しかねます。確かに、真面目な宗教の信仰者は神（仏）様の前に跪き、己を無にして祈ることによって神（仏）様に聴き真理を学ぶという共通した姿勢がよくとられますから、同じような宗教体験を通して同じ方向に導かれることも多いのですが、それぞれの宗教には教義というものがあって、究極の目標としていること、考え方はそれぞれ異なっており、これをプロセスが違うだけということは正しくないように思えます。それぞれの宗教を信仰する者は、当然ながら自分の信じるものが確かな真理であるという確信を持っています。ですから、その点を認めなければ各宗教が成り立たないことになってしまいます。

しかし、真面目な宗教は人間の魂 ( 心 ) を救済することを自らの課題とし、人が幸せになることを願うものであるという点で一致したものでありますから、人間社会で起こる出来事への対応ではそれぞれの信仰者がお互いに協力し合える近い関係にあります。一昔前までは、各宗教は他宗教を共存できない敵対関係と思い込み、邪教などと罵り合うことすらありましたが、今日の日本では、各種社会問題（イシュー）に対し、宗教者として宗教・宗派の壁を越え一致して協力する運動が広くなされるようになってきたことは喜ばしいことです。

宗教者は神（仏）様の前に跪き、己を無にして祈りつつ神（仏）様に聴き従って歩むものであるはずですから、信じるものが違うなどといって争い殺し合う宗教戦争など本来起すはずはないと考えます。今日の世界では、異なる宗教を信じる集団同士が争いを続けており、マスコミはこれをよく

宗教戦争と称しますが、争いの原因が宗教間の教理の差にあることはまずありません。実際のところ、パレスチナ地方で繰り広げられているイスラエル人とパレスチナ人の争いは決してユダヤ教とイスラム教の争いではありません。これは、第二次世界大戦後世界中に散らされていたユダヤ人を集め、２０００年前の故郷であるパレスチナに、現住民との間の共存を可能にする準備を整えることもなく、新たなイスラエル国家を樹立し入植させたという英米諸国の無茶苦茶な政策が原因であります。パレスチナ人の宗教は少数のキリスト教を含みますが大多数がイスラム教であり、イスラエル人の宗教がユダヤ教であるというだけのことで、これは、宗教戦争などではなく、双方の利害が反する住民間、民族間の対立構造に他なりません。

また、アイルランド紛争についてもマスコミはカトリックとプロテスタントの宗教戦争と解説しますが、北アイルランドはかつて英国によって武力によりアイルランドから分離されて英国領とされた歴史があり、北アイルランドでは元々の住民であった人々の宗教はローマカトリックであり、占領後に入植してきた英国人の宗教は英国国教会であるという関係があります。これもカトリック教会と英国国教会間での神学論争が原因となった宗教戦争ではなく、旧アイルランド系住民とイングランド系住民との利害・感情が絡んだ対立に他なりません。

ただ、これらの紛争の原因は宗教上の対立ではないにせよ、それぞれの住民 ( 民族 ) には主たる宗教があって、宗教の務めは人間の魂（心）を救済することにあり、人々が幸せになるように導くものであることを鑑みれば、それぞれの宗教の指導者には双方が共に共存していく道筋を模索し、是非、よいリーダーシップをとって欲しいものと願うものであります。

神学者や聖職者あるいは他宗教の方々から危ない解説だとおしかりを受けるかもしれませんが、門前の小僧としましては、信仰者が己を無にして天なる絶対者 ( 神 ) に心の窓を通して問いかける ( 祈る ) ときに、人間側が「父なる神様」、「アラーの神様」と呼ぼうが、「阿弥陀様」「お釈迦様」「大日如来様」と呼ぼうが、「学問の神様」「平和の神様」「山の神様」と呼びかけようが、お応え下さる天なる絶対者は祈る人の心にちゃんとメッセージを届けてくださるはずと理解しています。自らの心に根ざした真面目な信仰をお持ちの方は神に聴くすべをお持ちの方でありますから、小生は宗教が違ってもこれらの方々に基本的な信頼がもてるのです。

## § 第 29 話 「孫に教えられ」の手記を添えた義援金

これはたしか 200 万人とも言われた大量の餓死者を出した 1960 年末期のビアフラでの大惨事の際の話であったと記憶している。ビアフラという国はすでにない。ナイジェリア軍事政権に反発するイボ族を中心に東部州に一時期建国された小さな共和国であった。この出来事は「ビアフラの悲劇」と呼ばれて世界的に注目された。日本でも新聞・テレビ・週刊誌などに報道され、多くの人がその惨状に心を痛めたのでした。

一家団らんでテレビを見ていたとき、ドキュメンタリー番組でビアフラの子供達の映像が流されたのです。まだ、言葉が十分に話せない幼児も一緒に映像を見ていたとのこと。画面をじっと見ていた幼児が、突然立ち上がり台所に走っていって、餅を手に握りしめて戻ってきてテレビの画面にその餅を差し出し、ガリガリに痩せお腹だけが膨らんで気力も失い立ちつくし

ている子供に懸命にわたそうとしていたとのこと。それを見たその子の祖父でありその家の主人であった人が大変な衝撃を受けたのでした。こんな年端もいかない幼児が目の前に映し出される悲惨な状況に心を痛め、なんとかこの子供達を助けたいと自分に出来ることを必死にしようとしている。大人である自分は一体何をしているのだとの思いに駆られたそうである。

この方は広い田畑を持つ農家の方であったようで、このとき安定した日本社会で暮らしている子供達に美田を残すより、それを手放して飢餓で命の危機に貧しているビアフラの人たちに救援物資を贈る方が重要なことだと心に強く感じたということである。この方は早速田畑を処分して当時のお金で２０００万円ほどの義援金を贈ったのでした。そして、それには「孫に教えられ」という手記が添えられていたとのことです。当時の２０００万円といえば、今の２億円ほどになるでしょうか。

この出来事を聞いた小生は大変感動し、40 年を経た今に至るまで忘れることができません。この事例は、子供の純粋な心が大人の心を揺り動かし行動を促す力を持っていることを証しているといえるでしょう。

「イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、言われた。『はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。』」（マタイ 15：3）

## § 第 30 話　和解の出来事

これも２５年ほど前になるでしょうか。フィリピンの北部山岳地方でのボランティア活動を行なった学生達の体験話です。学生達は夏休みを利用してフィリピンの北部山岳地方の村に奉仕団として出かけていった。貧しい農村で子供達はまともに教育が受けられない状況にあった。学生達は村の基盤整備を行い、子供達に読み書きを指導する計画である。基盤整備といっても学生達に大きな工事が出来るわけではない。山道を整備し小

川に掛かっている腐れた丸木橋を新しい丸木で架け替えるなどの内容である。現地に到着し明日から奉仕活動に取りかかろうとしていた晩に、彼らの宿舎に一人の古老が現われた。彼は日本からやって来た若者達をにらみつけ、「お前達は４０年前この村で何があったか知っているのか?日本の兵隊が女性や幼児にまで乱暴し、殺害・略奪などの非道を行なっていったのだ。」と怒りを露わにまくし立てたうえで、多くの村人が殺害された現場に彼らを連れて行き、日本人の悪逆非道を罵ったとのことでした。学生達はただただ頭を垂れ、身を固くして聞いていたとのこと。その晩は、皆暗い気分に包まれ、眠られぬ夜を過ごしたそうである。朝となって、気を取り直しそれぞれの持ち場に散って予定していた活動を開始した。彼らの奉仕活動に村人達は概ね好感を持ってくれ、文字を教えてもらった子供達も学生達を慕ってくれたそうである。予定期間の活動を終え、帰国するときには村人達から感謝され、暖かい見送りを受けた。これに気をよくした学生達は翌年も奉仕団を結成して再びこの村を訪問することになった。ところが二年目の最終日の前夜に、かの古老が再び学生達の前に現われたのである。学生達は緊張し、身を固くして古老を迎えた。その時、古老

が彼らに向かって発した言葉はなんと「君たち、来年も又この村に来てくれるかい?」であったそうである。

おそらく、この古老は許すことの出来ない恨み骨髄の日本人、その同類と思えた学生達を当初は何をしでかすのかと冷たい目で遠くから観察していたものと推察される。２回にわたる彼らの奉仕活動を見守る中で、この学生達に昔の残虐非道な日本人の姿はなく、４０年前の日本人とは異なる人間であることを理解していったのでしょう。汗を流して村の環境整備を行ない、子供達に読み書きをお教え、村人達との信頼関係を築いていった学生達をさわやかな青年として受け止めることができていったものと解されます。彼の中での日本人像は徐々に変化し、憎しみが氷解していったに違いありません。

この古老のように決して赦せないという強い思い、憎しみが凝り固まって植え付けられた人の心を溶かしたこの出来事は、２３話でお話ししました「赦す」という人間の行為、和解への道について深い示唆を与えているものと小生には思えます。

## § 第 31 話　沖縄愛楽園訪問

私が初めて沖縄を訪問したのは沖縄の本土復帰の年（1972 年）であったと記憶している。当時教会の学生達がＯ氏を中心に沖縄のハンセン病療養所「愛楽園」訪問活動を続けていたが、沖縄は復帰までは外国扱いであり、渡航手続を必要とし、国家公務員であった小生は手続が厄介であったため、沖縄訪問を敬遠していた。復帰が成って小生の訪問も実現できたのである。愛楽園は自身が病者でもあった青木恵哉師が中心となって設立された療養所である。師は 16 歳でハンセン病を発病、香川県の大島療養所に入所、ここで洗礼を受けた。その後熊本の回春病院に転院し、英国国教会宣教師ハンナ・リデル女史の感化を受け 1927 年沖縄の病友への伝道に派遣される。焼き討ち事件など地元の強い抵抗に遭いながら、

1938 年病友と守り続けた土地（屋我地島大堂原 ( うふどうばる )）に「国頭 ( くにがみ ) 愛楽園」を設立する。これが現在の国立療養所沖縄愛楽園の前身である。

1972 年当時、この病気については「らい病」という呼び方が一般的であった。本病はらい菌によって起こる慢性の細菌感染症で、末梢神経や皮膚が犯されるという症状がでる。重傷となると皮膚に変形を生じ、顔かたちまで変わってしまうため人々からひどく恐れられた。家族で発症する例が多いため遺伝病と誤解された上に、天刑病等とまで言われ、病者やその家族には非人道的な仕打ちが繰り返され、多大の苦労・心労を強いてきた歴史がある。

ハンセン氏によって「ライ菌」が発見されてからは、研究が進んで特効薬も開発され、完治する病気となった。菌自体の感染力は弱く通常生活で感染することはまず無いのであるが、以前は発症した母親が幼児を長時間抱っこするなど、体力の弱い者が発症者との濃厚な接触によって感染してきたようである。現在は既病者も治療によって本病自体は完治しているが、体の変形などの後遺症が残ってしまうため、偏見を受け社会復帰ができずに療養所内で生活を続ける人が多いという事情がある。

30 数年前、小生が初めて愛楽園を訪問したときの様子を紹介致しましょう。到着した愛楽園の正門の両側は黒っぽいコンクリートの塀が続き、一見刑務所とも見える情景でした。そのコンクリートの塀には機銃掃射の弾痕が多数ついておりましたが、それは戦時中米軍にこの施設が兵舎と誤認され攻撃を受けたときのものとのこと。門の中に入りますと右手に交番のような建物がありましたが、これは面会所で以前は外来者が園内に立入ることはなくここで入園者と面会をしたとのことでした。郵便配達もここまでここから先は入園者自身が配達をしていたとのこと。園内が一般社会から隔絶された刑務所のごとき領域であったことを偲ばせるこれらの遺構は、沖縄海洋博が催された年、皇太子であった現天皇が愛楽園を訪問される

前にきれいに撤去されたのでした。誰がどのような発想でそうしたのか想像するのはいささか興味深いところであります。

日本ではらい予防法の下で、病者の強制収容と、子供を作らせないように堕胎や避妊手術の強制政策によって、また特効薬ができて容易に治療が可能となったことにより、新しい患者がでる可能性はなくなり、近い将来日本からハンセン病は消滅し、過去に繰り広げられた本病にまつわる不幸な出来事が二度と繰り返されることはないと思われますが、エイズ等人に怖れられる病気の患者に対しては将来においても、本病におけるのと同じような非人道的な扱いが私たちの社会で繰り返されることを否定できません。そのことを思うとき、後遺症を抱え今なおひどい偏見の中に生きておられる元ハンセン病患者の方々の逝去と共に、この方々が体験した過去の不幸な出来事を決して風化させてはいけないと思うものです。

## § 第 32 話　沖縄愛楽園の方々との出会い

私が長屋形態の夫婦舎に住んでいるある夫婦を訪ねた時のことです。タンスの上から巻かれた莫蓙をもってきて縁側に敷き、どうぞここに座ってくださいこれはあなた方社会の人しか使っていませんからというのです。「社会の人」という言葉がとっさに理解できず「ええ私は学生ではなく社会人です。」と頓珍漢な返事をしたことを覚えています。しばらくの間をおいて「私たちは社会から隔絶された入園者で、あなた方は一般社会で生活している人」という意味であることを理解しました。病気がうつらないことはよく承知していますからそんな気遣いは無用ですよといって莫蓙を巻いて返しました。すると、今度は封を切っていない袋詰めのお菓子を出して勧めてくれます。自分たちは触っていませんから安心して食べてくださいということです。入園者の方が健常者に如何に気を遣い自分を小さくして生きてこられたのか、想像するだけでも痛ましいことでした。

入園者の方の部屋を訪問しますと、よくおいでくださいました、冷蔵庫にビールを冷やしておきましたからそれを取ってここに座って飲みながら話でもしていってくださいといわれます。手先が不自由なため自分で冷蔵庫を開けて運ぶことが困難な方が多いため、自分でお取り下さいというのです。しかし、ビールをご馳走になって無駄話をしてきたのでは面目が立たない、聖ミカエル教会の信徒としてこのボランティア活動に参加した以上、何か入園者の役に立つことをして帰らなければと思うものですから、目の不自由な方のところでは何か読んでほしいものはありませんかとか、手の不自由な人のところでは手紙を代筆しましょうとか、やたらと親切の押し売りをしたものでした。今にして思えば、当時はまだ外の社会との行き来が少なく、園内に閉じ込められた状況の入園者の方々にとっては、何かしてもらうというよりはどんなことであれ一般社会の様子を少しでも知りたいとの思いがあり、我々とは向かい合ってじっくりと話がしたかったのだと思います。私達は何か役に立ちたいと思う気持ちがはやって、園の方々が実際

に望んでいたことに十分応えていなかったように思えます。

この病気は末梢神経の麻痺から起こります。痛い熱いという感覚が麻痺していますので、火傷をしても怪我をしてもとっさに危険から手を守る行動がとれません。ですから指先を失っている人が多いのです。また、視神経を侵される人も多く盲人の比率が高いのです。不自由者センターに入居しておられたＵ氏は盲人であるだけでなく耳もほとんど聞こえませんでした。私たちが部屋を訪ねて声をかけますが、いつも返事をしないで後ろを向いたまま座っています。気むずかしい人なのだと思い私たちは敬遠して訪問を控えておりましたが、この方は耳も聞こえない、コミュニケーションの取り方は背中に大きく字を書くとよいと教えてくれる人がおり、仲間のＴ君がＵ氏を訪問し会話を交わしてきました。どんな会話をしてきたのか聞いて驚きました。「今の天皇は誰か?」（昭和４８年当時）という質問で、「裕仁天皇」と背中に字を書いて答えると、「あの方はまだ天皇をしているのか」とつぶやいたというのです。目が見えず耳もほとんど聞こえない中で生活されていたＵ氏には新聞やテレビは勿論、ラジオも役に立ちません。外界からの情報入手の術が限られ、背中に字を書いてもらうことでわずかに他者とのコミュニケーションはとれるのですが、その厄介な作業を人に強いることを遠慮され、生活上必要最小限の事柄以外ヘルパーの方に問うこともしなかったのでしょう。本病のため家族知人から隔絶され、仲間の入園者や職員との対話さえ困難であった中で生きてこられたこのＵ氏、隣に入居され盲人でありながらなにかとＵ氏の世話をされていたＫ姉、すでに亡くなられたこの心優しいお二人のことが思い出されます。

３０数年前聖ミカエル教会の青年たちが参加し、ボランティア活動と称しながら、楽しく遊び、沢山のことを学ばせていただいた愛楽園は、我々にとって人の生き方、生きる姿勢を教えられたまさに人生塾と呼ぶに相応しいところでありました。

## § 第 33 話　祈りの家教会の方々

沖縄愛楽園内には日本聖公会に属する「祈りの家教会」がある。園の創立者である青木恵哉師は宣教師ハンナ・リデル女史によって派遣された伝道師であったため、師のもとに集まった病者にはキリスト教信仰に導かれた者が多かった。愛楽園の中でも私達と親交が深かった祈りの家教会信徒の方々は聖書を真剣に読み、一心に祈ることが生活の一部に浸透していた。若い私達のようにキリスト教を観念的に捉え、聖書を頭で理解しようとするのではなく、きちんと心で読み、信仰的に捉えておられた。自ら取捨選択したわけではないにせよ、この世（朽ちる世界）での可能性を否応なしに剥奪されてしまった入園者の方々は、希望と自らの存在の軸足を朽ちない世界である天国にしっかりと置いておられることが私達の目にも感じられた。決して高い教育を受けられた方々ではなかったが、ぽつりと語られる言葉が時として哲学者の言葉のようでハッとさせられることがあり、まだ若く、この世での可能性や望みにしがみついていた私達青年の目からは眩しいような先輩達でありました。

木曜会という木曜日に定例の集会がもたれるグループがあり、ある時小生もゲストということで例会に参加させて頂きました。お祈りの後、その日のテキストとなっている聖書の箇所（マタイ：25 章「タラントン」のたとえ）が読まれ、朗読が済んだとき「山田さん今日の朗読箇所について話をしてください。」と司会の方から突然振られてしまいました。見学者のつもりが急遽話をする立場に立たされて冷や汗をかきました。「人は神様からそれぞれに才能が与えられている。その才能を見出し、磨きをかけしっかり社会に役立たせなさいと言う勧めであろうと思います。しかし、最後の『誰でも持っている人は更に与えられて豊になるが、持っていない者は持っているものまで取り上げられる。』との言葉は誤解されやすいように思え、一寸気になりました。強欲な資本家が労働者から絞れるだけ絞って更に豊になり、貧しい人は更に貧しくなるみたいに聞えてしまいますが、これは与え

られた才能を真面目に使えば更に磨きが掛かって豊にされるが、使いもせずにおけばさび付いて与えられた才能まで失ってしまうという戒めと私は理解しました。」という趣旨のコメントを汗をかきかきしたように記憶しています。普段あまり真面目に聖書を読んでいなかった小生が日頃からよく読み込んでおられた祈りの家教会の方々を前にしての拙いお話しでしたが、それ以来お陰様で、この聖書の箇所は小生にとって思い出深いものとなっています。

そのような先輩方も多くはすでに天に召されてしまった。1972 年当時園内には八百数十人の入園者が生活していたと記憶しているが、現在は２６０名余となっており、祈りの家教会の日曜日の礼拝出席もかつては百数十名であったが現在では３０名足らずの状態となっている。存命でおられても自室から教会までの歩行が困難となっている方が多いためです。

ライ予防法が廃止されたのは 1996 年でした。条文は実質的に死文化されていたとはいえ、強制収容・逃亡者の強制連行などの非人道的な条文が現行法として存在していたのです。元患者の方々が声を上げるまで、長い親交をいただいておりながら、その事実の重大さに気付くことなく廃止運動をしてこなかった自分を大いに恥じました。その後、ライ予防法の下で永年非人道的な扱いをしてきた国がせめてもの罪滅ぼしということでしょうか、園内施設もすっかり立派なものになり、ホテルのような老人施設となっています。せめて長生きをされている方々には偏見から解放されて快適な環境の中で余生を過ごして頂きたいと願うものです。

最後に日本の社会で起きたハンセン病患者が受けた苦しみの一端をご紹介致します。遺伝病と誤解されていたため、病者は子孫を残すことを禁じられ、避妊手術の強制と、胎児は強制堕胎がなされました。その上、その胎児はホルマリンに漬けられ、標本として数年前まで保存がなされていました。療養所内で生活を強いられた入園者は家族親族へ迷惑が掛かることを畏れ、偽名で生活されていた方が多かったのです。小生の知る限

りでは半数以上の方がそうであったと推定されます。亡くなられ、骨壺に入ってから本名が記されるケースが多かったです。中には生きながら戸籍から抹消されてしまっていた方もおられます。家族へ迷惑を掛けたくないために自らそうされた方、家族から切り捨てられてしまった方が居たと思われます。日本人（市民）として生きていることの証である戸籍までが消され、人間としての存在そのものを否定された中で生きなければならなかった苦しみを推察します。

入園者であり、晩年は祈りの家教会の牧師を務められた　司祭徳田祐弼先生の遺された和歌をご紹介します。

「この病（やまい）、われよりすべて奪いけり　永遠（とこしえ）の生命（いのち）一つ残して」

## § 第 34 話　宗教に頼るのは弱い人間のすることなのでしょうか？

宗教なんて弱い人間が求めるもので、健康で元気な人間はそんなものに頼ったりしないといわれる方がよく居られますが、はたしてそうなのでしょうか。神様に聴き従って生きるとは自らの努力を放棄し、自立心を喪失した生き方では無いと思います。

人が他者に頼るという行動はどんなときになされるかを考えてみましょう。まず、この世に生を受け生まれ落ちた時点で、赤子は人（主として母親）の援助なしに生きることは出来ません。この時点での人の自活力は他の動物と比べて極めて低いと言われます。母親に見捨てられた赤子は死ぬ運命にあるといえ、例外なく、全面的に他者への依存によって生かされています。では、成人した人間が困難に遭遇したときはといえば、他者に頼る前に経験から学んだ手法で自らその困難を克服もしくは回避しようとする行動を起こします。多くの場合、それで対応が取れるのですが、自分一人の手に余る場合もあり、そんなときに他者の援助を求める行為が採られます。他者の助けを借りることで困難を克服できることもありますが、人が生きていく

という過程では、人智の及ばぬ事柄にもまま遭遇します。人が協力しあってもどうにも解決できない問題があり、そんなとき人は神様に助けを求めます。この態度はよく「困ったときの神頼み」といわれ、揶揄されますが、人として至って自然な行動であると私には思われます。揶揄する人の心には自ら努力しようともせず神様に頼る「怠け者」という思いと、「助けてもくれない神様に頼る愚か者」という気持ちが潜在しているように思われます。

さて、皆さんはマザーテレサという方をご存知でしょう。どんな働きをされた方かよくは知らないという方もおられるかもしれませんが、インドで臨終が近い身寄りのない路上生活者を、せめて人生の最後は人間らしく旅立たせたいと世話をして看取る働きをされ、ノーベル平和賞を受けた人と言うことはご存知の方が多いでしょう。この方はローマカトリックの修道会の修女さんでした。「神の声」を聞き、伝統ある修道会を出て、貧しい人、困っている人たちを助けることを決意し、カルカッタにあるスラム街に移り住んで、孤児やハンセン病の人々の為に救済活動をはじめました。極貧の人に奉仕する「神の愛の宣教者会」を開設し、新設の修道会の責任者（マザー：霊母）となり、インド国籍を取得し、1952 年に行き倒れの人々や重症の人々を収容する「死を待つ人々の家」を設立したのです。そして、マザーテレサはケアする相手に決してキリスト教を押しつけることはなく、本人の宗教を尊重し、その者の宗教のやり方で看取っていました。バチカ

ンや修道会といった教会組織からの資金援助を期待することもなく、一人貧民街に飛び込んで地道に奉仕活動に励まれました。

皆さん、このマザーテレサを弱い人間だと思われる方はありますか?確固たる信念と、実行力を備えた強い人であったと思われるでしょう。確かに、我々の目にはそのように映ります。しかし、マザーテレサはいわれます。「人から社会奉仕者と呼ばれることには耐えられません。そして社会奉仕をしていたのだとしたら、わたしはとっくにやめていたでしょう。」と、「自分達は弱い人間で力などありません。自分の努力・精神力では仕事は成し遂げられません。私達はイエス・キリストに従っているだけです。臨終が近い身寄りのない路上生活者の世話をしておられるのは主イエスご自身であり、傍にいる私達は自分に出来ることでその手伝いをしているだけです。弱い人間を強い神様が使って下さるのです。」無理を背負うのではなく自分に出来ることをする、足りないところは主イエスが担って下さるという意識で働いておられた。現場にいる自分の傍にはいつも主イエスがいて下さるという確信（信仰）があり、自分の持っているものは弱さをも含めてみんな主イエスにお預けし、自らを無にして祈りつつ安心して主イエスについて行くキリスト者の姿が見てとれます。

人は問題意識を持ち、自らの努力でそれに立ち向かおうとしても無理が溜まり疲れ果て、挫折してしまうのが関の山です。私のような信仰が薄い軟弱者は「私に出来るのはここまでです。もう無理ですこれ以上何も出来ません。」とすぐ弱音を吐いて現場から逃げだそうとしてしまいます。しかし、しっかりした信仰を持った人はたとえ自分が躓いてもそれは自分の弱さ故のこと、主イエスが躓かれることはないと信じて現場から離れることをしません。疲れて倒れても又起きあがって主イエスの手伝いを始めます。このような生き方は決して自ら努力しようともせず神様に頼る「怠け者」には見えませんし、「助けてもくれない神様に頼る愚か者」ともいえないでしょう。

聖パウロはコリントの信徒への手紙２の１２：１０で言っています「な

ぜなら私は弱いときにこそ、強いからです。」と。弱いときこそ強いということは矛盾した言葉のように聞えますが、これは真理と思われます。自分の弱さを自覚しそれをも主イエスに預けてしまった人の中に神様の強さが宿るということだと思います。この様な人は弱さの中に留まることはなく結局は神様によって強くされるのです。マザーテレサに限らず多くの聖人と呼ばれる人達の生涯がこのことを実証しています。

聖パウロは更に語ります。「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。」（フィリピの信徒への手紙４：１３）

## § 第 35 話　東日本大震災に見舞われた日本

３月１１日に日本中を震撼させる東日本大地震が起こった。太平洋プレートが日本列島に沈み込んでいることが要因とされますが、それに乗っかる形でぶつかり合っている日本列島の岩盤が５００ｋｍにも及ぶ幅で東方にずれ込むという現象であったとのことで前代未聞の大地震であった。地震の規模はマグニチュード９．０というとてつもない値であり、宮城では震度７を観測した。その地震の破壊力にもまして、その地震によって引き起こされた太平洋沿岸の津波の脅威に人々は打ちのめされた。多くの人を街ごと飲み込み、町々の建造物が次々と流され、破壊されてゆく様は映像に撮られ、現場に居合わせた人だけでなく世界中の人々を震え上がらせた。荒れ狂う自然現

象の前に人間の存在のひ弱さ、無力の程を見せつけられた。この度は原子力発電所の事故がこの地震・津波によって誘発され、この人災的色彩の濃い災害までも重畳され、被災者の苦難は倍増している。

この大惨事は奇しくも教会の暦では復活祭 (easter) の準備の厳かな季節である大齊節（lent）に起こった。昔の人はこのような惨事が起こると、これは人間の傲慢に対する神の怒りだと受け止めることが多かったようだ。今回、東京都知事のＩ氏が「これは天罰だ」と発言し、多くの人々の反発をかってしまった。昔の人に近い発想からの発言であったかもしれないが、被災した人たちが神の怒りを受けるような行状をしていたという意味に聞えた方々からこの発言は失礼極まりないという反応が出されたものと思われる。当初発言を撤回しないと頑張ったＩ都知事であったが、結局失言を認め撤回した。

小生も、この大震災が神様の罰であったとは思えません。第 12 話でお話しいたしましたように、私たちの周りで不条理と思える出来事はまま起こりますが、これは神様が直接手を下されたものではないと思います。神様は天地を作りその管理を人にゆだねられた。人の心への働き掛けはなさるが、むやみにこの世の事象に直接手出しなされない方と理解しています。神様は罰を与えたのではなく、この世の出来事に目を注ぎながら、多くの人の命を絶ち、多くの怪我人を出し、家族を失い、家を失い、仕事を失った被災者の痛みを人と共に受け止め、「我が子（人間）よ、私の与えた天地は自然の恵みが豊かだが、時としてこの様に荒れ狂うものでもあるのだ。今回の悲惨な現実をどのように受け止め、

この困難をどのように乗り越えたらよいと思うのか。」と人々に問うておられるように思われます。

このような悲惨な状況の中でも、私たちは心に安らぎを覚え、勇気を与えられる出来事に出会うことがあります。この度は避難所で自身も避難民である被災した子供たちが健気にも「肩たたき隊」を結成し、ボランティアとしてお年寄りを訪ね肩をもみ叩いている姿がそうでした。子供たちの笑顔が、飾らない善意が人々の心にひと時の安らぎを与え、生きてゆく希望を呼び起こしました。その様子を映像で見た私たちもが癒された思いでした。日本社会でこのようなボランティア活動が根をおろしたのは阪神淡路大震災のときであったように思えます。家族であるから、親戚であるから、同郷の者であるからといった旧来の人のつながりを超え、自らが隣人となって助けにゆくというボランティアの存在は被災された方々の力強い支えとなっています。この度はかつての恩返しと阪神や新潟地方の方々をはじめ、日本中からのボランティアがかけつけ活動を開始しています。支援物資が全国から、外国からも届けられ義援金も集められています。人間に備えられている美しい一面を垣間見る思いがします。普段、順調に生活が営まれている時には他者を思いやることよりも他者に負けないようにと競う姿ばかりが目に付いてしまいますが、この出来事を通して私たちは忘れかけていた「人は一人では生きてゆけない。助け合って、励ましあって共に生きよう」という人間の本来的な心を呼び覚まされた思いがします。しかし、私たち人間はこれほどの大きな犠牲を払い、それを目にしなければそのことに気づくことができない存在なのでしょうか。今回の出来事は豊かで安定した社会で暮らしていた私たち日本人に突き付けられた厳しい現実ではありますが、失ったものを数えるのではなく、混乱の中で弱者を切り捨てることなく、皆で支え、共に生きてゆく新しい人間社会を創る時ではないでしょうか、否、それを成し遂げ世界に示さなければ日本は国際社会の中での低落傾向をさらに加速し、落ちこぼれの存在となってしまうでしょう。

この大惨事は教会の暦では復活祭の準備の厳かな季節である大齊節に起こったと申し上げました。復活祭前の日曜日を除く40日間が大齊節であり、最後の一週間は聖週と呼ばれ、最も厳かな期間となります。聖木曜日はイエスが弟子たちと最後の晩餐を取られた後にユダの訴えにより祭司長達に捕えられた日、翌日の聖金曜日は総督ピラトに引き渡され、無理やり十字架刑に処せられた受苦日を記念する日となっています。2000年前、弟子たちは仕事も、家も、家族も放置してイエス様に従って、三年もの間ユダヤのあちこちを旅してきました。彼らは貧しい者、弱い者であっても決して蔑ろにされることのない、皆が共に生きる新しい価値観の「神の国」の実現は近いと夢見て主イエスに従ってきたのでした。すべてをこの方にかけていたにもかかわらず、この頼みとする先生がユダヤ教の指導者たちに捕えられ、あっけなく死刑にされてしまったのでした。弟子たちの先頭に立ち、愛の革命を指導してこられた主イエスが、結局はこの世の権力者にねじ伏せられ、抹殺されてしまったという現実の前に、弟子たちは挫折し絶望のどん底に突き落とされてしまったのです。しかも、関係者であることが分かれば自らの身にも累が及ぶという恐怖にさいなまれながら、居所に身を寄せドアには鍵をかけて人目を忍んで潜んでいました。

命からがら高台に避難した今回の被災者は、高台まで辿りつけなかった人々が津波に巻き込まれ、家や車と共にさらわれてゆく様を目の当たりにし、さながら地獄絵巻を見せつけられる苦しみを味あわれたことでしょう。自らの命は繋ぎ止めたものの、配偶者、親子兄弟、友人、知人、多くの仲間を奪われ、更には家を、持てる物のすべてを失い、気が付いてみれば仕事さえもなくしていたという現実の中で、将来への希望を根こそぎ奪われ、絶望のどん底に突き落とされた被災者の心境は察するに余りあるものがあります。

被災から42日目に受苦日を、その二日後に復活祭の日を迎えました。日本中のキリスト者は被災者の心情と主イエスを奪われた弟子たちの心

情、すなわち、すべてを奪われ、絶望のどん底に突き落とされた者達の思いを重ねていたことと推察します。聖書は金曜日の午後十字架上で亡くなられた主イエスが日曜日の朝復活されたと記しています。居所に身を寄せドアに鍵をかけて潜んでいた弟子たちの真ん中に主イエスが現れて立ち、「あなた方に平和があるように」と言葉をかけられたと聖書は伝えています。この「平和」という言葉、原語は「シャローム」というヘブライ語ですが、この言葉は単に、争いのない、平和な状態をいうのではなく、平穏、無事、安心、安全あるいは健全、成熟といった人の心の状態を意味していることから、教会では「平安」と訳されることも多いのです。弟子達に発した主イエスのこの言葉は「私はいつも君たちと共にいるのだからまずは安心しなさい。そして、希望を失わず、勇気を出して、福音を述べ伝えなさい。」という励ましの言葉であったと小生は理解します。その場に居合わせなかった弟子のトマスは、亡くなられた主イエスが復活して姿を見せたなんで、

あり得ないことだ。私は復活された主イエスの手のひらに空けられた釘の穴にこの指を差し込むまでは絶対に信じないと強い拒否反応を示したと聖書は伝えています。トマスは自らが他の弟子達と共にいる時に再び御姿を現わされた主イエスを見て彼も信じたとのことです。「トマス、私を見たから信じたのか？信じない者ではなく、信じる者となりなさい。」と主イエスはト

マスを励まされたのでした。死んだはずの主イエスが御姿を現わされたことにより、弟子達の不安と絶望は吹き飛んでしまいました。権力者による迫害を恐れることなく、主イエスの復活の証人となって、福音を述べ伝えたと聖書に記述されています。

では、被災者の方々にはどのように希望が与えられるのでしょうか。復活日を迎えた頃の被災地では被災された方々自身が気を取り戻し、いくつかの新しい出発の試みが起きていました。その一つに津波によって多くの船を失ってしまった漁師たちが陸に打ち上げられた船の中で使用可能なものを探し、それらを集めて修理し、みんなで漁に出ようと協力している姿がありました。「これは誰の持ち船だとか言っている場合ではない。残って使える船を仲間で共同して使い、漁を再開するのだ。」という言葉を聞きました。この言葉から、海の男たちの心意気がひしひしと伝わってきました。原始共同体を連想されるような労働集団ですが、その形態は厄介な人間社会の仕組みを取っ払った、きわめて自然な姿に感じられました。人は当初、この様に協力しあう仲間が集団で生活をはじめ、共に汗を流して収穫を分け合い、子供たちを育て共に生きる社会（コミュニティ）を形成していったことが思い起こされます。人間社会がこの原点を回復すること、すなわち、物質的な豊かさの中で、また人間が作り出した複雑な仕組みの中で、個人の責任で生きていくことばかりが優先され、隣人の心情が見えなくなっている現代社会の不健全さに気付くことが問題提起されているように思えました。そのことを海の男たちの再出発の姿が教えてくれたように思えます。

バブル崩壊以来、日本経済は総崩れの状況です。「物作りの日本」は人件費の高騰で他国との価格競争に負けて立ち行かなくなりました。国際社会に向けた発信もできず、国としての発言力も低下し、低落傾向は長く続いています。にもかかわらず、過去の蓄積で国民はそれなりに安定し豊かな生活を保つことができていました。しかし、今回我が国は未曾有とも

1200 年ぶりともいわれる地震、津波、更には原発事故という大災害を被りました。自分は安全だと身を潜めている時ではなくなりました。

被災者である彼らが自ら立ち上がり、仕事を開始しても決して状況は明るくはないと思われます。漁はできても市場は破壊され、それを流通させるルートや仕組みが断たれている状況があります。彼らの志を成就させるには被災していない我々が彼らを支えようとする姿勢と協力が重要となるはずです。家族であるから、親戚であるから、同郷の者であるからといった旧来の人のつながりを超え、自らが隣人となって被災した方々の心情に目を注ぎ各自が応えられる支援をすることが、この危機を乗り越えるための我が国の方向性を示しているように思えます。５月の連休には全国から被災地にボランティアとして被災地に馳せ参じたいとボランティアの希望者が大勢名乗りを上げ、現地では受け入れられないほどであったと聞きます。人は悲惨な状況を知れば、自分も何とか手助けをしたという善意、健全な気持ちが起こります。教会はそれを聖霊の導きと呼び、信仰者は神様が我らと共にいましてなすべき業を促してくださると感じるのです。私たちに第一に必要とされることは被災者を隣人として受け止め、関心を持ち続け、その状況を理解することであると思われます。状況が分かれば具体的に何をなすべきかは個々の人に示されるものと思います。

地震・津波によってすでに亡くなられた多くの方々に対して、私たちはただ、魂の平安を祈りその霊を神様の御手にゆだねることしかできません。その方々の無念の思い、残された人々への思いを受け止め、我々が被災者への支援を心がけることがこれらの方々の霊に報いることになると存じます。

個々の人にできることは決して大きなことではないでしょう。しかし、大切なことは自らが隣人となって被災した方々の心情に目を注ぎ各自が応えられる支援をする心を持ち続けることであり、多くの国民のその思いが集結された時「皆で支え、共に生きてゆく新しい人間社会」を創ることにつ

ながるのだと信じるものです。それを成し遂げ世界に示すことで日本の存在意義を国際社会に示すことができるのではないでしょうか。戦争の悲惨さ・愚かさを骨の髄まで体験した日本、富と豊かさだけでは人は幸福にはなれないことを知った私たち日本人は、いま人間にとって本当に大切なものは何であるのかを学ばされているように思います。

「肩たたき隊」を結成し、被災した人々にひと時の安らぎを届けてくれた子供達には、被災というこの厳しい経験が負の遺産となることなく糧となって明るくたくましい生き方をしていただきたい、いつまでも周りを照らす光の子であってほしい、と心から願います。この子たちからあの笑顔を奪ってはならない。将来に希望を持ち続けることができるように大人たちは見守り支援したいと思うものです。

http://shibuya-michael.com

渋谷聖公会聖ミカエル教会 H.P.

信徒　山田　益男のコラム

http://blogs.yahoo.co.jp

/monzen_kozoh/MYBLOG /profile.html

日本聖公会東京教区

**渋谷聖公会聖ミカエル教会**

〒150-0012　東京都渋谷区広尾２－１－７

電話　03-3409-2079　　FAX　03-3409-2938

2013 年 10 月 11 日版